
MOTHER マザー

小島 柊人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOTHER マザー

【Nコード】

N2997B

【作者名】

小島 柊人

【あらすじ】

どうしてこうなってしまったのかは、今となっては分からない。人間とはいえないような体を引きずって、それでも僕たちは人間として生きたいと思った。失われてしまったものを取り戻したとき、ようやく僕たちは生きてもいいんだよ、と認めてもらえるような気がしていたのかもしれない。WIN

第一章・WIN・episode1：赤目の男

どうしてこうなってしまったのかは、今となっては分からない。
人間とはいえないような体を引きずって、それでも僕たちは人間として生きたいと思った。

失われてしまったものを取り戻したとき、ようやく僕たちは生きてもいいんだよ、と
認めてもらえるような気がしていたのかもしれない…。

WIN

ある程度発展している町だったら、大抵は街外れにこんな看板がある。

「H A N T E R S H O P ハンターショップ」

ここ10年、かなりの勢いで増えている。

これは、15年前から突如発生し、その生息数を増やし続けている生物のせいだろう。彼らは今までいた様な動物達とは全く違う。鼠のような大きさのまるで無害なものから、象みたいな大きさで牙を持つもの、猿のように知性の高いものや、目玉が多すぎるくらいついてしまった魚のようなもの……。奴等が出現したのは原因がはつきりとはしていないが、中には人を食するようなものもいたりする。初めて発見されたものが、子供を多く産んでいたことから、政府はこの生物を「チルドレン」と名づけ、そう呼んでいる。

ハンターショップは、このチルドレンの死骸を買い取る店である。チルドレンの中には人を殺しすぎて懸賞金がかかったものや、珍しい角や牙から、高く買い取られるものがある。そんなチルドレンを狩って、生活をしているものを、ハンターと呼び、戦うことが出来る旅人の中では生活の収入源になっているのだ。

「おい、こいつを頼む。」

その日、ハンターショップに持ち込まれたのは鹿のようなチルドレンだった。男はどん、とそれを店の亭主に見せた。

「おお、こいつは獰猛なやつだぜ。よく捕まえたなあ。」

男は亭主の言うことには答えず、聞いた。

「いくらになるんだ？」

亭主はチルドレンを品定めしている。足が普通の鹿とは違い六本あり、角はかなり尖っている。角に血がついているのを見つけて、亭主が聞いた。

「兄ちゃん。怪我してねえかい。」

「……。」

男は答えなかった。

「……。いくらだ？」

「これだとね、まあ角がいいからね、12000ジルだな！はい！」

男の手に12000ジルが手渡された。男は金をしまつと、すぐに後ろを向いて店を後にした。

しばらくして、また次の客が来る。

「おい、おっさん。頼むよ。いっぱい捕まえたよー。」

「はいよ、……って、こんな小さいのかよ。お前はいつも……。」

「へへ、小遣い稼ぎだよ。いいじゃねえか、チルドレンはお国が買ってくれるんだろ。」

「まあそうだけだよ。えーと、5匹だな。500ジル。はいよ！」

「お、おっさん。今日はすげえのがいるな。前の客かい？このチルドレン。立派な角じゃねえか。」

「ああ、久々に大物だよ。旅の人みたいだったけど……。無口でね、ああそうそう、髪で隠してたけど、チラツと見えたよ。あの

男、左目が赤かったな。」

「赤い目・・・？へえ、左目？左目だけか？」

「ん。確かに片目は普通だったよ。」

「赤い目ねえ。レッドアイじゃないのか？こんな大物担いできたんだろ？」

「俺もなあ、一瞬思ったんだけどな、レッドアイだったら今頃前線で戦争してるだろう。こんな街でハンターやってるわけないだろ。」

「まあな。まあ、いいや。また頼むな。」

「次はもうチヨイでかいの頼むよ。」

左目に、赤い目を持つ男はどこかに去っていった。

episode 2 逃亡者

フィークの街は便利な街だ。都会ではないが、ある程度のものは揃うし、チルドレンからの対策をちゃんとしているから安全で、そのため人の出入りも多い。俺も今、ここを拠点にして生きている。国もこの街の管理はちゃんとしてるようで、人々にも活気がある。辺境の街に比べたらここは天国みたいに見えるかもしれない……。二日間街を出ていたが、何も変わらない……。そう思っていた。

所狭しと果物や雑貨のテントが並ぶ商店街を歩く。人ごみをゆつくりと進んでいく。

そのとき、果物のテントの中から飛び出してきたのが、それだった。

ガシャーーーーーン！！

同時に勢いよくおれにぶつかった。

「っつー！！」

何だよ……。こんな真昼間からコソ泥か……。？と思ってそいつの顔を見たときに衝撃が走った。金髪の長い髪に金の瞳……。！金髪はどこにでもいるが、こんな瞳を持つものはあまりいないだろう。

「君……。！」

と言い掛けたときに、

「待てえー！！！！」

その後ろから兵が追ってきた。あの制服は……。帝国の兵！！なんでこんなところに！？その瞬間、彼女はまた走り出した。

「！！待て！！彼女は……。！」

「どけ！一般市民が！！」

「っ！」

兵隊にとつかれ、それを避けた。

2人を追って人ごみを抜ける。帝国の兵じゃあんまり手を出したくはないが、仕方がない。人気がなくなつたところまで泳がせながら追う。走りながら兵の後頭部を狙って・・・！

「うつ・・・！」

兵が倒れこむ。悪いな。

「おい、君、もう大丈夫だから俺の話を聞いてくれないか！！」

そう呼びかける。しかし女は止まらない。でも俺はどうしても確かめなくてはいけないんだ。ようやく追いついて、女の腕を掴む。そのとき。女はすごい勢いで俺の手を振りほどいた。すり抜けた。・といったほうがいいのかもしれない。とのかくその素早さに驚いていると、その女は近くにあった家の屋根までふわりと飛びあがった。そして、また走る。

・・・やっぱり。普通の女じゃないか。そう、彼女はおそらく・・・。

俺も、地面を蹴って屋根に飛び上がり、彼女を追った。俺もそのくらいは出来るが、これは普通の人間の身体能力ではありえないことだ。

そして、屋根の上で彼女を押し倒した。タックルした・・・。よくなものだ。そうしなきゃ止められそうになかった。

暴れる彼女を抑えこむ。すると、一瞬首にひやりとするものが触れた。彼女がナイフを出し、俺の首に当てていたのだ。いつの間に・・・？

「君は・・・マテリアルの者じゃないのか？」

一瞬彼女は目を見開いた。

よく見たらボロボロだ。貌も、服も、靴も汚れて傷ついている。腰には細い体に似合わない長剣を携えて・・・。

「レッド・・・アイ・・・」

彼女は俺の左目を見てそう一言言つと、気を失ってしまった。

その手から刃こぼれしたナイフが音をを立てて落ちた。

episode 2 逃亡者（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもございますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します！

episode 3 ウィッシュテール

「ヒナ、頼む。この娘の具合を見てくれないか。」

俺が運んできた彼女を見て、ヒナは驚いていた。・・・そりゃ驚くな。

「ウイン、その子どうしたのよ・・・。」

「ちよっと、追われていたから匿ったんだ。気を失ってしまったが、一応、頼む。」

「・・・はあ。ちよっと待つて。とりあえず寢室に運んでくれる。」

彼女を寢室のベッドに寝かせる。ヒナは医術を心得ているから、こういう時心強いな・・・。俺も疲れた。少し座ろうか・・・。そう思つて、会議室の椅子に腰掛けた。

「よお、ウイン、おかえり。どうだった。」

「・・・別に何も。」

こいつはピック。気さくで誰とでも仲良くやつてる。こんな能天気な奴が何でこんなところにいるかなんて深いことは知らないけれど・・・。

「何もくないだろ。すっげえキレイな子、拾つてきてさうしたのあの娘！」

「別に。追われていたから匿っただけだ。」

「追われてたつて・・・。誰に？」

「・・・兵だ。ピアスの制服だった。」

「ピアスつて・・・帝国兵か。やつかいだな。・・・大丈夫なのか？あの子」

「ああ……。心当たりがある」

そのとき、寝室からヒナが出てきた。

「どうだった？ヒナ。」

「大丈夫よ。気を失っているだけみたいね。随分汚れているから着替えさせたけど、大きな怪我はないわ。」

「そうか、良かったな。ワイン。こいつが女の子連れてくるなんて嘘みたいだモンな。へへ。」

ピクが茶化す。こいつは放っておこう。

「……。ああ。ところでヒナ。他に……。何か変わった所はなかったか。」

「他に？色素が随分薄いとは思うけど……。別に何も異常はないわよ。」

「そうか。……。なら、いいんだ。」

ビリアス帝国が支配するこの横暴な世の中……。その犠牲者達が集まり、結成したのが反乱組織ウィッシュテール。ここは俺達ウィッシュテールのアジトだ。フィークの街なら人の出入りが多く、簡単には帝国にも見つからない。道具屋をメンバーで経営しつつ、その地下室にアジトを構えている。しかし、道具屋だけでは財政が追いつかない。そこで俺みたいな戦闘メンバーが他の町までハンターショップに出稼ぎに行くのだ。

しかし今回ののはちょっとまずかったかもな。帝国兵と騒ぎを起こしてしまった。俺達はここで組織を組んでいる以上、出来るだけ目立ってはいけない……。

「あと、今回の稼ぎだ。」

ヒナはしっかりしている。金銭の管理もヒナの仕事だ。

「あら、74000ジルも。ありがとう。助かるわ。ウインがいなかったらウィッシュテールの皆、今頃餓死してるかも。なんてね。」

「ありやーす!!」

ピックがいつものようにうるさく騒ぐ。

「ちよつと、いいか。ヒナ。二人で話が。」

「いいわよ。」

ヒナと二人、彼女のいる寢室に入る。

「ウインはしばらく外出禁止ね。分かってる?この街で騒ぎを起こすのも、それに参加するのも・・・。」

「・・・分かってる。悪かったよ。」

「言いたくはないけど、あなたが思ってる以上に、あなたのその瞳の色は目立つわ・・・。でも、あなたがこんなことするなんて珍しいわね。」

「・・・たぶん、この娘はマテリアルと関係している。」

「国立研究所、マテリアル・・・?あなたがここにきた理由よね。」

「・・・ああ。この娘は、俺と同じかもしれない。だから放っておけなかった。迷惑かけてすまない。この娘が起きるまで、様子を見ていたんだけどいいか。」

「ええ、いいわよ。作戦会議は明日だし・・・。メンバーが帰ってきて食事の用意が出来たら呼ぶわ。」

「すまないな。」

ヒナはそうして、寢室を出て行った。

眠っている彼女の隣のベッドに腰掛けた。国立研究所マテリアル・・・。もし彼女がそこから来たのなら・・・。

傍らのかごにはヒナが脱がせたであろう彼女の衣服や持ち物がいっている。やっぱり、汚れてボロボロだ。赤い石がついたハンドメ

イド、手作りっぽい髪飾り？かな。俺の首に当てられたナイフ・・・。
そして腰に携えていた長剣・・・。

「！！！」

帝国の紋章が刻まれている・・・！！

帝国兵？まさか、だったら何故帝国兵に追われて・・・。

もぞつと彼女が動いた。

「う・・・ん・・・」

その瞳はやはり金色で、暴れて逃げ回っていた女とは思えないほど。キレイだった。

episode3 ウィッシュテール（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもごさいますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します！

episode 4 なくした名前

一瞬、その美しさに見とれて止まってしまった。いけないいけない。

「気がついたか。」

そう言って近寄った・・・が、びくつと体を震わせて、ベッドの端に後ずさりしてしまった。どうやら脅えさせてしまったようだ。

「大丈夫、何もしないよ。」

・・・彼女は何も言わず、ベッドの端から俺を見上げている。だめだ。完全に怯えている。

「飲み物でも持ってくるよ。少し、待っていて。」

落ち着かせよう。らちがあかない。そう思つて一度、寝室から出た。

寝室の前に椅子にはピックが座っている。出たよ、うるさいのが・・・。

「なあなあ、起きたのあの子?!」

「起きたけど、酷く怯えているんだ。何も話さない。」

「まじ？俺あーゆー子すっげータイプ！なあ、会わせてくれよ！」

「今飲み物を持ってくる。それからな。」

キッチンに向かう。丁度ヒナが夕食を作っていた。

大人数の食事を作るのは結構な時間がかかるらしい。食事当番は当番制で、もちろん俺も当番がくれば作るがどうもうまくいかない。ヒナの料理はこのメンバーの中でいちばんうまい。

「ヒナ、立て込んでるところ悪いけど彼女が目を覚ましたんだ。

お茶、もらえないか？」

「丁度お湯沸いてるから・・・はいどうぞ。どう？彼女。」

「怯えてて・・・。まだ全然しゃべってないんだ。」

「そう・・・。あんまり興奮させちゃだめよ。何かあったら呼ん

でちょうだい。」

「ああ。」

キッチンを出ると、ピックが待ち伏せしていた。

「俺が持つてくぜー？へへっ」

ああ・・・しつこいな・・・こいつは。でもこいつの軽さで彼女の緊張も解けるかもしれない。

「・・・ああ。宜しく頼むよ。」

寝室のドアを開ける。

彼女は変わらず、ベッドの端っこで小さく座っている。

「お待たせ。気分は・・・」

「はじめましてー！気分はどうっすか？！はい、熱いお茶っす！
気をつけてね！」

俺の言葉をさえぎってピックがハイテンションでお茶を差し出す。

ああ、お前のこういうところはさすがだ・・・。

彼女はびっくりしながらも勢いでお茶を受け取っていた。

「・・・っ」

思いがけず熱かったらしく、お茶を少しこぼす。

「ああゝ気をつけて言っただじゃん！！」

すかさずピックがタオルでふきとった。

「へへっ・・・（めっちゃくちゃかわいいじゃんゝってかすっこい綺麗じゃん！いいね、これはいいねゝ）」

ひそひそとピックが耳打ちをしてくる。・・・そうだな。俺もこんな綺麗な女見たことない。ピックの耳打ちには答えずに俺は彼女に話しかけた。

「・・・少しは落ち着いたかい？」

こくん、と彼女は頷いた。何だかうつろな目をしている。

「よかったー！！いや、良かったっすー！ねえねえ、名前は？俺ピック！で、こっちのちょっとクールぶってるのがウィン。よろしくねー！！」

「なまえ……。」

初めて彼女が口を開いた。でも、そう一言言った後、彼女は持っていたカップを手から落とした。見事にカップはピックの手に落下。

「あちゃー……!!!」

熱いお茶を手にとぼされてピックは慌てて椅子から転げた。

そんな大騒ぎのピックはもう無視でいい。

「分からない……。なまえ……。？」

彼女は頭を抱えて、顔を苦痛に歪ませた。

「頭……。い……。た……。」

「だ、大丈夫か?! ピック、ヒナを!!」

「あつち……親分、合点だ!!!」

回復力の速い奴だ。そう言うときピックは寝室を飛び出していった。

「分からないって……。君、記憶がないのか?!」

「い……。たい……。」

記憶がない……。いろいろと聞きたいことがあったのに……

「くそ……。」

ヒナが寝室のドアを思いつきり開けた。

「はいはい、どいてどいて!!」

ヒナにどかされる。

「大丈夫よ、どうしたの?」

「頭が……。いた……。」

「マテリアルのことも……。覚えてないのか?!」

俺は興奮して割り込んで言った。

ヒナに間髪いれず頭をはたかれる。

「でっ!!」

「病人に大声出さないの!! どうしたの? 何か悲しいことでもあった?」

彼女を見ると……。彼女は泣いていた。泣きじゃくっているわけでもなく、頭痛に顔をゆがめながら涙をこぼしていた。

「痛いわね……。そうね。いいのよ。とりあえず、休んで。」

ピックがベッドの周りをちよろちよろする。

俺もどうしていいかわからずおろおろしていた。

ヒナが振り向いて言った。

「男は出て行って頂戴！」

「え．．．なんで」

「いいからでていきなさい！！」

ヒナに部屋から追い出された．．．。

「あーあ。追い出されちゃった。ワインがでかい声だから」

お前がちよろちよろるさいからだろが！！！！

くそ．．．帝国の剣のこととか聞きたいことがいっぱいあったんだよ！！何はなしてるんだ？俺は寝室のドアを少し開けて覗いていた。

「大丈夫？」

彼女がこくこくと頷いている。頭痛は治まったらしい．．．。

「私、ヒナよ。女同士だから。よろしくね。」

男でも何かするかつての．．．。

「なまえ．．．」

「名前．．．。覚えていないのね？」

彼女はまた頷く。

「きつと嫌なことがあったのね。そのうち思い出すわ。無理に思
い出さなくてもいいのよ。」

「．．．。」

「とりあえず、なんだかすごく汚れているみたいだから汚れを落
とそう。おいで。」

やべ！こっちにくる．．．。

俺は急いでドアから離れて、近くの椅子に掛けた。

episode 4 なくした名前（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

評価・意見・ご感想いただけたら幸いです！

ブログもございますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します！

episode 5 赤い石

他のメンバーも戻ってきたので、俺達は夕食を食べていた。

「今日の当番って・・・ヒナだよなー？」

「何かいつもより・・・味が・・・なあ？ウイン。」

悪かったな・・・。ヒナに彼女を見てもらっていたから俺が最後の味付けをしたんだよ。あえてなにも言わずに夕食を口に運ぶ。

「あ、でもうまいよな。うん。うまいうまい。」

ピックがフォローを入れる。

「・・・。」

浴室からヒナがバスローブ姿の彼女をつれて出てきた。

まだ彼女を見ていなかったメンバーが注目する。

寝室に入った後、食堂がざわめいた。

「おい、だ、誰だあれ？」

「分かんないけど・・・すっげー美人だなあ。」

「金髪だよー目も金色・・・いいね！！」

「だろだろー？俺今日お茶渡しちゃったもんね！！ウインが連れてきたんだよ！な！ウイン」

俺に振るなよ・・・。

「えー！？？！ウインが？！」

「・・・ああ。」

「珍しいじゃん、ウインが女関係なんて、ねえ？」

「・・・そんなじゃない。」

本当にそんなんじゃないんだよ・・・。食器をキッチンに運び、寝室へと向かおうとする・・・。

「お、俺も！あのこのところに行くんだろ？」

ピックも着いてくるらしい。何故・・・。まあいい。

「俺も見たい。」

「俺も！俺も！」

・・・勘弁してくれ・・・。

「ま、待ってくれ。実は彼女、記憶がないらしくて・・・。あんまり興奮させたくないんだ。さっきピックとは少し話したからピックはいいとして、他の皆はちょっと待っていてくれないか。」

食堂からはブーイングだ。

「くっそーピック、てめー」

「早くつれて来いよ！紹介してくれー」

「あ？てめーにはメリーがいるだろー！言いつけんぞ！俺に！紹介してくれ！」

あーうるさい。

「早く早く、ウイン早くー！」

ピックが急かす。なんて素早い奴だ・・・。こいつもうるさい・・・。

さて、寝室のドアをノックする。

「あー、ヒナ。俺。ウインだけど。いいかな？」

「どうぞ。今丁度着替え終わったところよ。」

ドアを開ける。

白いワンピース姿の彼女がそこにいた。随分落ち着いたようだった。風呂に入れただけあってどろどろだった髪も肌もさっぱりしてすっきりした顔をしている。

「随分、落ち着いたみたいだね。」

「・・・。」

彼女は頷いた。

「ウインが、あなたを助けてくれたのよ。」

彼女が俺をじつと見る。そして俺を指差して、

「ウイン・・・？私を・・・。」

と、一言言った。

「完全に自分のことも分からないみたいなのよ。分からないって。」

「・・・そうか。」

「まじで記憶ないのー？俺、二回目だけどピックね。宜しく！」
彼女は今度はピックを指差して言った。

「ピック？」

「そうそう、ピックだよーん。」

俺は彼女を見た。ノースリーブの白い腕には、切りつけられたような古傷が何箇所もあった。そして最近のものだろう擦り傷。

「それでも、ヒナ、ピック。完全にまだ信用しちゃダメだ。」

「何よ、ウイン・・・自分が連れてきておいて。」

俺は彼女の荷物を手に取る。

「本当は・・・覚えてるんじゃないのか？！」

帝国の刻印が刻まれた長剣。刻印を彼女に突きつけた。

彼女はきょとんとしている。

「帝国のスパイじゃないのか・・・？！」

「おい、ウイン。それ・・・」

「彼女の荷物だよ。悪いけど、俺が連れてきた。スパイだったら・・・

・俺の責任だ。この子が国立研究所から帝国に送られた人間兵器だって可能性もあるんだ。」

彼女はヒナをみて、何だか困っているようだ。

・・・考えすぎか？いや、考え過ぎて事はない。現にあの運動能力、目の色は違うけど俺と同じだって可能性もある。

「え、何？」

余り事情を知らないピックも困っている。

「ウイン、やっぱり分からないみたい。そんな剣幕じゃ・・・また怯えてしまうわ。」

「・・・くそつ。何か覚えていないのか？」

俺は彼女の身につけていたものを入れてある籠を漁った。

「ほら、これは？！君のだろう！！」

彼女が身につけていた赤い石の髪飾り・・・。

彼女はそれを持つ俺の手を取った。

「あ……。」

「……何か思い出したのか？」

彼女は髪飾りを手にとつて、しゃがみこんだ。

ヒナもしゃがんで、彼女を見た。

「……それ、何かあるの？」

「……分からない。でも、これは私の……。」

「思い出したのか!？」

ピクがむきになった俺を抑える。

「分からないんだよ……仕方ないじゃんか。なあ、その髪飾り、何なの？」

「……分からないけど……安心するの。」

「そうね……大事にしないとね。」

ヒナが子供をあやすようにしていたから、何だか大きな声を出していた自分が恥ずかしくなった。

「……悪かった。もういい……。」

彼女が俺を見上げていった。

「……これ、ウインの目と同じ色。」

左目が少し疼いた。

彼女はあの時、気を失う前、俺の左目をみて「レッドアイ」と言った。

俺は彼女に見覚えがあつたんだ。

俺が研究所にいたとき、彼女が一度だけ見たことが歩きがする。

全て諦めてしまおうとしたときに、終わりにしようとしたときに、この金色の瞳を見た気がする。

でも、彼女は何も覚えていなかった。

あのときのこと、その他の事も。

「・・・そうだな。」

俺は、少し笑ってそう言った。
彼女も少し笑った気がした。

episodes 赤い石（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもございますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します！

episode 6 左目の痛み

その日の夜は、どうしても寝付けなかった。
ベッドで何時間も不毛な時間を過ごした後、水でも飲もうと思っ
て、ベッドを立った。

食堂は静まり返っている。そりや皆寝てるよな・・・。
コップに水を汲んで、食堂の椅子に腰掛けた。ふう・・・。
彼女と会ったことで、色々なことを思い出す。

忘れてしまいたいこと・・・きつと多すぎるんだ・・・。
と、その時！誰かが後ろから手を回し、俺の目を塞ぐ。

「だゝれゝだゝ？」

この声・・・生暖かくてごつごつした手・・・。

「・・・ピックだろ」

「あれ？ばれちゃった？へっへー。」

ピックが手を離して笑った。

「そうか、お前が今日の当番か・・・。」

ウィッシュテールでは、夜中何があってもいいように最低一人は
朝まで起きて見張りをする決まりだ。

「そうでーす。寂しくてよぉーウィンが起きてるなんてラッキー

」

「・・・そうかよ。」

「んー・・・ウィン、寝付けないのか？」

「・・・ああ。何だか色々もやもやして・・・。」

「まあ、彼女のこととか色々今日はあったもんな。」

「そうだな。さつき寝室のカーテンから覗いたら、何にもなかつ
たような顔して寝てたよ。」

「そっか・・・。」

「ああ・・・。」

「・・・。」

「……。」

しばらく沈黙が続いた。？ピックが黙るなんて珍しい……。

「なあ……。ウイン……。聞いてもいいかな？」

「何だよ」

「い、いや、言いたくないことならいいんだけど、さ。」

「何だよ気持ち悪い。」

「あの……。さ、今日、国立研究所……。マテリアルがどうとか言ってたけど……。」

「……。」

「ウインの左目って……。やっぱり“レッドアイ”なのか？」

「……。一応……。な。」

「まじで？！やっぱりそうだよな！すげえな！元“レッドアイ”って本当だったのか！」

「……。すごい……。？これが……。？」

そう、でも確かに俺は帝国の兵士だった……。

この目は……。俺が忘れてはならないこと。

俺に与えられた……。烙印のようなものだ……。

俺は昔から国を守って戦う兵士に憧れていた。傭兵学校を卒業した俺は、迷わず帝国の兵士になった。戦、戦の日々だったけど、ただ俺は誰かのためになっていると思うていたし、誰よりも強くなりたいと思っていた。

帝国の兵士の中でも憧れの的は、最強戦闘部隊「レッドアイ軍」。彼らは多くの帝国の兵士の中から、戦闘能力を認められた、選ばれたものだけになれる部隊。数ある部隊の中でも最強と呼ばれ、高い地位と名誉が与えられる。選ばれた兵士は国際研究所マテリアルで、

最強の戦士となるべく手術を受ける。そこで手術を受けた兵士はその証に瞳が真紅となり、レッドアイ軍で活躍する……。

それはそう8年前、俺は帝国の兵士だった……。

「お疲れさまー。」

「お疲れー。」

「ウイン、お疲れ!!」

「よおレオ。お疲れだな。」

「でもこの所見回りと警備ばかりだからな。体がなまるぜ。」

「まったくだな。まあ、戦がないってことは平和だって事だ。」

「戦がないってことは俺達が活躍する場所がないって事だろ! まあいいや……。なあなあ、それよりこれ見てくれよ!」

「お、今日の新聞……。あ、“レッドアイ”の特集か! なになに……。 “レッドアイ軍、サリー軍に完全勝利! サリー国帝国の領地に”」

「まあ見るよ、ウイン、ここ、ここ!」

「あ、バリー先輩!! すっごい大きく載ってるじゃん! やっぱ目赤くなってるよ。かつこいいな!。そっか、もう前線で戦われているんだな……。」

「すこいよな。こんなに大きく載って。“最強部隊レッドアイ軍の戦士達の戦場”だってさ。」

「すごいな……。そういえば、バリウス先輩もレッドアイ部隊に選抜されていたよな。」

「確か……。そうだったな。でも載ってないぞ。」

「やっぱり成績によって新聞に載るとか載らないとか決まるのかな」

「そうなのかもな……。」

「もう一度飲みに行きたいな……。先輩と。」

「ウイン仲良かったもんな。忙しいんだろうよ。だってレッドア

イになったら家族さえ連絡取れないって言うぜ。」

「ああ……。でも絶対俺はレッドアイになってやるぜ!!」

「俺もだ!!よし、ウィンこれから非番だろ?!!」

「おう!やるか!!」

「日ごろの鍛錬がモノを言うんだぜ!!!!」

「じゃあ腹筋300回な、とりあえず!」

「きつついなー!よっしゃー!!!!」

・・・俺達は、毎日訓練を欠かさなかった。

ひたすら英雄になりたくて、レッドアイになりたくて・・・。

—その4年後・・・

「ではレッドアイ軍選抜者の名前を発表する!」

「はい!!」

「セントシティ部隊、イグ! —はい!

アリアス部隊、ティマ! —はい!

ランドマーク部隊、ウィン! —はい!

同じくランドマーク部隊、レオ! —はい!

以上四名のものは、本日をもって各部隊を利隊し、明日の7時、
国立研究所マテリアルに向かう!

彼らに敬意と名誉を!」

—ドクン ドクン ドクン—

選ばれた、喜びは束の間だった。

—ドクン ドクン ドクン—

『うわあああああああ——————!!!!!!!!!!

!!!!!!!!

俺は激痛が走る体で転げ回った。
ただ痛みに耐え切れず叫んでいた
全身が焼けるように熱かった。
左目が取れて落ちるかと思った。

『ああああああ．．．．．！！
れ、レオ！！レオ．．．．．』

そこに、レオはいなかった。そこにいたのは．．．レオじゃなかった。

「ーおい、ウィン！ウィン！大丈夫か？！」

ピックの声で俺ははっと我に帰った。

「あ、わ、悪い。ボーっとしちまつて。」

「すごい汗だぞ．．．。顔色も悪いし。」

「．．．すまない。大丈夫だ。」

動機が治まらない。左目が酷く熱く、痛んだ。

「ごめん。俺がへんなこと聞いたからかな．．．？」

「．．．お前のせいじゃない。気にするな。嫌なことを．．．思
い出しただけだ。今日は．．．悪いな。」

「．．．。ごめん．．．。」

ピックが申し訳なさそうに席を立った。

「いつか．．．話すよ。俺もお前がここに来た理由とか．．．聞
いてなかったし。」

ピックが振り向いて言う。

「ありがと．．．。」

ピックは少し、レオに似ている。顔とかじゃなくて．．．雰囲気
が。

動機と震えが止まらない．．．。

そう・・・きつと忘れたいことは多すぎる・・・。

忘れてしまえたなら楽になるんだろうか・・・彼女のように。

それでも忘れてはいけないんだ・・・あの全てを、この目に焼き付けておかないといけない。

そうじゃなきゃきつと生きていけない。こんなガラクタみたいな体を抱えて・・・。

だから、忘れるわけにはいかないんだ。

俺はコップの中の水を一気に飲みこんだ。

ドクン、ドクン、ドクン・・・。

忘れない記憶から逃げるわけには、いかない・・・。

episode 6 左目の痛み（後書き）

ご覧いただきありがとうございました！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもございますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します！

episode 7 セラムの花

―レッドアイに選ばれたんだ・・・―
―待ち望んでいた時だぜ！・・・―
―また、先輩に会えるかな？・・・―
―いこうぜ、ウィン。・・・

・・・ここはどこだ？

もやが掛かったような、草原・・・。

レオが呼んでいる。先輩がいる。

「レオ！先輩！」

俺は追いかける。でも追いつかない・・・。

「おい！待ってくれ！」

濃い霧の向こうに、白い建物が見えてきた。

あれは・・・マテリアル・・・！！！！

レオ達が門の前で立ち止まった。

―ウィン、来いよ。

「レオ、先輩！だめだ、そこは！！！」

きこえてないのか・・・？

「だめなんだ！！そこだけは・・・行くな！！そこはだめだってば！！！」

届かない。

止められない。

白い建物の門の中に消えていく……。

「行くなー！ー！！」

はあ

はあ

はあ……

夢……夢か……。

気がつくところこそは寝室だった。汗だくだ。くそ……何なんだ……
・昨日あんなことを思い出したら夢にまで現れた……。ようや
く寝付けたと思ったらこれか……。

隣にはすでに片付けられたベッドがある。ピクだけがその隣の
ベッドでぐーぐー寝ている。もう皆起きているのか。外出禁止とは
いえ、俺だけ寝てるわけには行かないな。重い頭を抱えてベッドか
ら降りた。

「随分遅いな、ウイン。」

食堂までいくと、偵察に出ていたリーダーのイエローが帰ってき
ていた。

「イエロー……。戻ってたのか。」

「おう。今日の朝飯は俺だぜ。早く食わないとなくなるぜー。」

「ああ……。」「

自分の分を皿に盛り付けて椅子に掛ける。

「もうヒナから聞いているかもしれないが……」

「あの娘のことか？ああ、ヒナにさっき聞いたよ。で、帝国兵と
バトったでお前は外出禁止。」

「・・・本当にすまなかった・・・でも・・・」

「マテリアルの関係者かも・・・だろ？」

「・・・ああ。だから放って置けなくて・・・。」

「まあヒナが本当に記憶が無いといってるがな・・・でも責任は拾い主にあるからな。一人分増えた生活費を狩りに勤しんで養ってくれ。」

「ああ・・・。」

「おはよう。遅いわね。今起きたの？」

ヒナが彼女を連れて朝食を持ってきた。イエローの前の椅子に掛ける。彼女はその隣に座る・・・。ちなみにヒナとイエローは恋人同士だ。今回の偵察の状況をしながら、俺は彼女の様子を伺っていた。きよろきよろ周りを気にしながら朝食を口に運んでいる。

「悪い、きのう寝付けなくて。」

「だめよちゃんと寝ないと。あ、イエロー。この子がそうよ。」

「初めましてー。えーと・・・」

「あ、そうね・・・名前が分からないのよね。不便だから・・・なんて呼ぼうか？」

「しっかし、話どおり変わってるな。白いからシロちゃん？なんてな。金髪のコちゃんじゃ何だし。」

「おいおい、犬じゃあるまいし・・・。」

「そんな決め方嫌よ。犬じゃないんだから。んーと・・・」
ヒナがしばらく黙って言った。

「セイラ」

「え？」

「セイラ。セイラがいいわ！」

「セイラ？何でまた。」

「あれ、セイラムでしょ？」

食堂の棚の上に花が飾られている。セイラムの花だ。メンバーの誰かが置いたのだろう。

「セイラか・・・いいんじゃないか？きれいな名前で。」

イエローが賛同する。そりゃシロや金よりはいいだろう。賛成しておこう。

「俺も、いいと思うよ。」

「じゃあ、決まりね。朝礼で皆に伝えるわ。ねえ、あなたはセイラよ。」

「セイラ？」

「そうよ、あなたの名前！」

「名前……。」

セイラはきよんとしている。

「決まりだな。ここにいるからには何もさせないわけにはいけないから。落ち着いたらそのうち班を決めて働いていただくが。改めて、俺はウィツシュテルのリーダーのイエロー。俺の仕事は偵察、実行が主だからあまりないかもしれないが、宜しくなセイラ。」

「そういうこと。改めて、ヒナよ。私は管理が主な仕事だけど、一応医療の心得があるから、具合が悪くなったら私のところに来てね。あと洋服は私のを貸してあげる。よろしく……。」

「……改めて、俺はウイン。実行と資金稼ぎが主だ。一応君の責任者になるから……。よろしく。」

セイラは少し恥ずかしそうに俺達を見てうなずいた。

食事の後の朝礼では今日のメンバーの行動を確認したりする。イエローが指揮をとる。

「今朝偵察から戻ってきた。例の件だが、帝国デッドパーク……。ここは帝国に反対運動を起こした同志が管理されている刑務所の一つ、第6刑務所がある。といっても、第6刑務所は軽犯罪者が入れられていて警備も新人の兵士が多く、帝国の施設の中でも手薄だ。初めの計画では、ここを襲撃して入れられた同志を解放しようと思っっている。」

・・・確かに、新人の兵士は重要な任務には就かない。戦闘にも慣れてない・・・やりやすいだろう。俺はメモを話をまとめて取る。
「だからもう少し上を狙うことにした。第6刑務所を襲撃した後、帝国側が体制を整える前に一晩置いて連続で帝国イリユークの第4刑務所も襲撃する。結局は様子を見て判断することになるが、今回の計画はかなり危険を伴う。皆・・・ついてきてくれるか？」

「当然っすよ！」

「何かしないと何もはじまらないんだ！」

「やってやるうぜ！」、

「ありがとう。それに向けて準備は万端にしておきたい。誰もが無事に戻ってこられるように。では早速、準備に取り掛かってくれ。火薬、武器防具ははなるべく質のいいものを頼む。俺とウィンとピツク、ダイ、シースは実行班だから、ピツクが昼、起きたら会議をする。あと、ウィンから話がある。」

「えー、昨日いたメンバあしそうでーはすでに知ってると思うが、この・・・彼女が今日からメンバーに加わったセイラだ。といっても記憶がない。それはヒナが確認している。何も分からないと思うから、色々教えてやってほしい。」

少し皆がざわめく。かわいー、とか大丈夫なのか？とか・・・。

「じゃあ、みな各自動いてくれ！」

皆、それぞれの仕事に分かれて活動しだす。本当なら俺はチルドレンを狩りに行くのだが・・・今は外出禁止令でうごけない。しようがない。何かすることは・・・。イエローに聞くか。

「それまで俺は何すればいい？」

「ん。ウィンは俺と一緒に武器防具の点検してくれ。」

「了解。」

・・・ん？何か突っかかるな・・・。と思つたら、セイラが俺の服の裾を掴んでじつと俺を見ていた。

「あ・・・まあ・・・えーと・・・。」

参ったな・・・責任者は俺か・・・。ヒナも買出しでないし。

教えてやってくれつつも皆忙しそうだもんな。

「じゃあ・・・一緒に来て。」

セイラはこくんとうなづいて、後ろをついてくる。イエローが何だかニヤニヤ見てくる・・・。

「いいですなあ。お兄さん。」

何だよ・・・。

武器庫・・・そんなに豊富なわけではないが、コツコツ資金をやりくりして貯めてある。今度の計画のために、点検しておかなければならない。武器はそれぞれに合った使いやすいものを使う。あとは襲撃に使う火薬。これが高価な上に、まとめて買った、爆弾などを買うと目を付けられやすい。これは、買出しのメンバー・・・ヒナ達が遠くの街で燃料や業務用として細かく買ってくる。それを改良して爆薬に作り直す。こういう火薬の処理はピックが得意なんだよな。ああ見えて。

「刑務所は下っ端の兵士ばかりだが、油断は禁物だ。動きやすい鎖の羽織物を身につけたほうがいいな。」

「それにやっぱり火薬が足りてないな。」

「武器も今のうちに手入れしておかないと。出来るだけ磨いておこうか。」

「ん。じゃあ、セイラも。これで手伝ってくれるか？」

イエローが油の染みた布を手渡す。セイラが受け取る。

「これを磨くの？」

「ウイン、教えてやれよ」

「ああ。こうやって・・・。あ、そんなに油つけないで。そうそう。刃物系は俺達が研ぐから、そしたら磨いて。」

「はい。」

返事をしてくれるようになった。すこしは慣れてきてくれたか？イエローと俺はせつせと剣を研ぎだした。チルドレンの体液でベタベタだ。酸性の強い奴もいて、手入れを怠ると溶けることもある。

「ウインの剣か？これ。お前のは綺麗だな。」

「ああ……。剣だけは手入れをする習慣が抜けないんだ。そろそろもういいか……。セイラ、これ頼む。」

刃を研ぎ終わった剣を渡す……。セイラは剣を受け取ると、それをじっと見つめていた。

「セイラ？」

「……。」

何も答えずに磨きだす。何だ？しかし、ひやつとした。また逃げ出すと思った……。その時、武器庫の扉が勢いよく開く。

「おはよう！！良く寝て元気なピック様登場〜！」

寝起きなのにどんなテンションだ……。

「イエローお帰り！昨日夜番でさー。どうだった？」

「久々なのに相変わらずだなあ〜お前。寝癖ひどいぞ。」

「あり？いいのいいの、寝癖さえかつこいいでしょ？俺ってば……って……。おお！！おはようございまっす！」

ピックがセイラの顔を見て目を輝かせている。

「あ。ピック、セイラって呼ぶことにしたんだ。」

「セイラちゃんーん！！さすがに綺麗な名前だね！すごく合ってるよ！！うん！何なに？仕事手伝ってくれてるんだ！えらいね！さすがだね！んもう最高！何しててもチョー綺麗！！」

セイラの両手を握ってピックは盛り上がっている。セイラも困っているし……。イエローが困ってるセイラの頭をぽん、と撫でた。

「ありがとう、って言えばいいんだよ。」

セイラは少し黙って言った。

「……。？ピック……。ありがとう」

「どういたしまして〜！」

「そうそう。」

「ピック、まだ寝てていい時間じゃないのか？」

「こんな美女がいるのに寝てられるかー！さあ仕事しようぜー！」

ピックが火薬の処理をし始め、仕事に戻る。

「ウイン・・・あれから少しは眠れたか？昨日は・・・その、ごめん。」

「いいよ、気にするな。」

「ん。ありがと。」

「何だ？ウイン、ピックを振ったのか？男同士はさすがになん。残念だなピック」

イエローが茶化す。

「違っう！！俺はストレートだっ！！」

ピック、あれからそんなこと気にしてたのか・・・こいつのほうこそあんまり寝てないんじゃないか？しかし、拾ってきたのは俺だっていうのに何も出来ないな。セイラに何か教えてやるのも面倒を見るのも年の功じゃないけどイエローやヒナは流石だ。俺は・・・俺が出来ることはどこにいてもあまり変わらないのかもしれない。戦うことだけだ。今も昔も・・・。

「ある程度終わったな。」

「ああ。さてと、ダイとシースを呼んで、一応計画を煮詰めるぞ。」

「じゃあ俺呼んでくるよー。」

ピックがドアを開けた瞬間、だれかの大きい声がした。

「い、イエロー！イエローさん！！」

何だ？！

「どうした？！何だ？！」

息を切らせたメンバーが戻ってきた！

「イエローさん・・・あの、やばいっす！！セイラさんが、あの、町の外！！」

「落ち着け！！！！どうしたんだ！」

「す・・・すいません。外に帝国兵がいつぱいうろついで・・・。」

「帝国兵が？何かあったのか？」

「それで、このビラが配られて・・・。」

「ビラ？」

俺達はビラを覗き込んだ。

「・・・どういことだ、これは・・・。」

episode7 セイラムの花 (後書き)

ご覧いただきありがとうございます！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもございますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します

episode 8 探し人

「…これは…！」

ビラは、お尋ね者のビラだった。イエローが読み上げる。

「ある事件の重要参考人の女性。金髪、金の瞳、白い肌。背は158センチ前後…。捕らえたものはすぐに帝国の施設まで。報酬を与える。」だと…？セイラの事じゃないか…。帝国が探してるのか…？重要参考人…？」

「昨日最後にフィークで姿を消したって、帝国兵達が探してるんすよ！家宅捜索が入るかも！」

「そりやまずいな…。今、店番誰だ？」

「ダイです！」

「ユイカに変える。ヒナが戻ったらヒナにする。女のほうがいいだろう。」

「はい！」

しかし妙だ…。何で名前を出さないのだろう？マテリアルから逃げ出したのなら、わざわざ昨日の今日でビラを出した位なら、一刻も早く見つけたいのだろう。いつそ殺してしまったほうがマテリアルの秘密が漏れるのを防げる。だったら、凶悪犯にでも仕立て上げて生死不問にしたほうが効率はいいはず…。どういうことだ？

ピックが不安そうに言う。

「ウイン…。」

「俺が…責任は取る。放り出すわけには行かない。」

「だよな…・うん。」

「イエローさん、何かあったんですか？」

店番をしていたダイが地下に降りてきた。

「緊急事態だ。家宅捜索が入るかもしれない！武器防具、火薬を隠せ。」

「マジっすか?! はい! すぐ取り掛かります!」

「もしも地下が見つかったときの対策も立てなきゃな…。くそ…。」

「計画はどうなる?」

「計画は実行する。ここまで練り上げた計画を無駄にしたくないからな。」

武器などを隠すのを手伝おうと動こうとしたとき、セイラが腕を掴んでいた。少し震えている。

「…私…ここにいないほうがいいのかな…? 私を探してるって…私のこと、知っているのかな…?」

「…大丈夫だ。俺が責任を持って帝国の奴から君を守る。」

「守る?」

「そうだ。だから、安心していい。」

「…うん。ありがとう。私も手伝う! 何かしたい!」

「じゃあ、武器防具を隠すから、こっちに。」

「はい!」

ピックがつーつと近寄ってくる。

「どうしたのおーウインらしくもない…とうとう女に興味持ち出した?」

「そんなんじゃない。お前も手伝えよ。」

「任せとけーい!」

「おい、ウイン、ピック、ダイ、それが終わったら会議するぞ。」

イエローが声を上げた。俺達は作業に取り掛かる。武器庫から武器を持てるだけ持って…。

「…で、どこに隠すんだ?」

「あ、ウイン知らないんだっけ。ここ、下水道と繋がってるんだよ。上の道具やが通れないときの非常口ってわけ。でも使ったことないけどね。」

「そうなのか? 下水道に隠すのか…どこから行くんだ?」

ダイはドアを開けて言う…。

「ここだよ。」

「ここって…トイレ…？」

「うん。トイレの床がさ…よいしょ」

俺達のアジトは、洞窟みたいで殆どが土と石の簡単な作りだ。トイレの床は土になっているがその土を掘り起こすと、鉄の扉が現れた。

「驚いたな。この辺りどうも臭うと思ってはいたんだ…」

「あははー。少しどぶくさいけど、仕方ないよね。俺もはじめ驚いたよ。でも始めて入るなあ。セイラ気をつけて。」

ピックがへらへら笑う。俺達のはしごを伝って、下水道に降りていく…。確かにここなら見つからないだろう。その時…。なにやら嫌な気配が…。

「ダイ！！あぶない！！」

「え?!」

俺は思わずダイの手を引っ張る…が、

「ぐわあっ!!」

間に合わなかった。ダイの手には何かが噛み付いている…！

「ち、チルドレンだ!!」

「下水道に住み着いてるのか!!」

「ぐああああ!!と、取ってくれ!食い千切られる!!」

魚のようなチルドレンだが…8つの目、その口には鋭い牙がある。体には無数のトゲ。下水道から飛び跳ねてきた。俺はそいつのからだをつかむ。とげが手に刺さって、うまく掴めない…!!

「くそお!!」

「ウイン!こっちからも!!」

クソ…!!!やられるか?!食いつかれるのを覚悟したとき、そいつを真つ二つに切り裂いたのは…セイラだった。ピックが目を丸くしている…

「ウツそん…。」

セイラの目つきが違う。俺も正直驚きながら持ってきた武器でダイの腕に食いついていたチルドレンをはがした。

「ク…。サンキュ…。腕なくすところだ。」

「いや、重症だ。止血するから…。おとなしくしてろ！ピック！油断するな！魚だけじゃない！！武器を取れ！」

「お、おう！」

俺はダイの腕を縛りながら、セイラの動きに驚いていた。セイラが持っているのは武器庫に偶然会った誰かの剣だ。それを軽々使いこなし、一撃でチルドレンの急所を切り裂いていく。凶悪な姿の魚が次々と飛び跳ねてくる。その傍から巨大化した鼠のチルドレン…。ピックは自分の武器を腕につける。ピックの武器は装着式のダガーソードだ。

「変な病原菌とか…持っていないことを祈るぜ！！」

しかし動きがすばやく、なかなか当たらない…。そこをセイラが上から一刺しする。終わった…。セイラは鼠から剣を引き抜く…。ピックが驚きながらも息をつく。

「片付いたな…。いや、セイラ、助かったよ。」

「ピック、ウィン、ダイ、大丈夫？」

目つきはいつものセイラの目だ。だが、チルドレンの返り血を浴びて、手が赤く染まっている。顔にも血がついている。ピックがセイラに少し脅えてるのが分かった。セイラはそんなピックに不思議な顔をしているが…。

「ああ…俺は大丈夫だ。でもダイが重症だ。上に連れて行こう。」

「つつ…」

「うわ、酷いなこりゃ。地下水路にチルドレンか…。非常口だったのに通るだけで命がけだな。ヒナが買出しまで戻ってくるからダイ、俺の荒い手当てで我慢してくれ。」

上に戻るとイエローがダイの手当てをする。ピックが傍で言う。

「鎖のネットでもないと、武器防具滅茶苦茶にされちまうぜ。」

「そうだよなあ。しかもダイがこんな怪我しちまうとは…。お前は大丈夫か？」

「俺達は無傷だよ。セイラが助けてくれたんだぜ。」

「セイラが？」

イエローがセイラを見る。そしてそのあと、俺を見る。

「本当だ。的確な動きで…。かなり訓練されてたんじゃないかな。」

「やはりレッドアイのように、マテリアルで何かをされたのか…。そうでなければあの反射神経や、出会ったとき見せたあの運動能力は…。」

「そっか…。やはり、ウインの予想が当たってたてことか？」

「え、なにが？」

ピックは話についていけないでいる。

「分かった。ダイ。今回の計画はおとなしくしてろ。セイラを連れて行く。」

俺はつい大きな声を出した。

「何言ってる！今帝国に探されている張本人だぞ?!」

「戦力が足りない。一番適役じゃないか。俺達の存在を帝国の奴らにアピールできる機会でもある。」

「でも…」

「奴らが捜している女が、反対組織にいるんだぞ？これはチャンスかもしれないんだ。危険は元より承知の上だろ？しかも家宅搜索が入ったときに、セイラはいないほうがいい。やってくれるか？セイラ？」

「私…」

「ん？」

「それは…ウインの為？」

「ん…。まあ。ウインの為でもあるし、俺達のためでもあるな。」

「ウインは私を助けてくれた。だから、私がウインの役に立てる。」

なら。」

「だ、そうだ。どうだい保護者さん。」

だれが保護者だ…。責任者じゃないのか…。

「セイラ、すまない。お願いしてもいいか？」

「はい！」

セイラはにっこりと答えた。

第6 刑務所襲撃計画…殺されても仕方がないしテロを起こした俺達は掴まったらただじゃすまない。それでも俺達は何もせずにはいられなかった。セイラを帝国の施設に連れて行くことで、セイラの事が何か分かるかも知れないと思ったし、記憶が戻るかもしれないと思った。

episode 8 探し人（後書き）

ご覧いただきありがとうございます！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもごさいますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します

episode 9 第6収容所襲撃計画

夕方になるとヒナ達買出しメンバーが帰ってきた。買ってきたものを広げてイエローに説明している。

「火薬と、いざって時の煙球も少し。あと鎖帷子^{くさりかたびら}…こんなものね。急いで火薬を詰めれば今夜、間に合いそうじゃない？でもびっくりしちゃった。このビラ。セイラはどう？」

「ありがとう。はじめはちよつと不安そうだったが、よく分かってないのか普通だな。今はウィンに懷いてついて回ってるよ。」

「あら、意外〜。そういうの不得意そうなのだね。」

「へへ…意外とな。あの二人結構いい感じだぜ。あと、家宅搜索が入る可能性があるから武器らしきものは地下水路に隠した。そのときにダイがチルドレンに襲われて怪我しちまってな。ちよつとみてやってくれ。」

「チルドレン？地下水路にまで?!」

「ああ、とりあえずダイ、寝室にいるから。そのあとは店番頼む。お前が一番いいだろう。」

「忙しいわね。了解。」

「ピック、火薬大目を買ってきたわよ！よろしくね！」

「りょ〜かい。」

ヒナはダイの手当てをしに寝室へ向かう。イエローがすつとやってきて、火薬を加工しているピックを覗いた。

「さてと、ピック、どのくらいできた？」

「ん〜まあ、十分じゃないけどある程度は…。ウィンとセイラが手伝ってくれてるから早いよ。」

「ん。まあこんなもんだろ。シースを呼んでくる。今夜決行だ。食堂に来てくれ。」

「ワイン、ピック、シース、セイラ。予定よりは少し早いが、今夜第6収容所襲撃計画、決行しようと思う。外はセイラ搜索で帝国兵がうろつろしているが・・・この騒ぎに便乗したいと思ってな。フィークに兵が集中してる。デッドパークもいつもより手薄なはずだ。それで・・・、ダイがちょっと怪我しちまってるから、代わりにセイラに参加してもらおう。セイラもこの計画表を良く見てくれ。」

シースがびっくりしている。

「・・・大丈夫なのか？」

「ピックやダイが言うにはかなり出来るらしいが・・・何せ記憶がないからな。フォローはよろしく頼む。」

「了解。」

「デッドパークまではどうやって？」

「東から列車が出ている。夜を待つて出発だ。問題は・・・セイラなんだよな。そこで、これをつけてくれ。」

「・・・カツラ？」

イエローが黒髪のカツラをセイラに手渡す。

「頭につけるんだよ。ほら。」

セイラの頭にかツラを乗せる・・・まあ簡単なやりかただが、金髪、金の目の女を搜してるんならカモフラージュにはなるだろう・・・な。黒髪になった全然イメージが変わった。

俺達は夕食をとりながら夜を待つことにした。俺達襲撃メンバー以外にも緊張感が漂う。、当然か・・・。もし、このアジトが暴かれて検挙されればここに居る誰もがただでは済まない・・・。いつものがやがやした空気が嘘みたいだ。

「さて、出るぞ。手投げ弾と煙幕、武器、ちゃんと持ったか？」

「イエロー。みんな。」

ヒナが店から降りてくる・・・。

「ヒナ、店番は？」

「今ちよつとだけ他の子に頼んできたわ。．．．気をつけて。」

「．．．あまり、心配するなよ。大丈夫だって。」

「みんなも、気をつけて．．．。無事に．．．帰ってきて。」

「うん。」

他のメンバーも見送りに集まる。

「イエローさん．．．皆さん．．．幸運を祈ります！」

「がんばって！」

「気をつけて！」

「やだな、みんなあゝ俺がいれば大丈夫だよ！！心配するなつて！」

ピックが大見得を切る。

「じゃあ、行つて来るよ。」

俺達はしっかりと準備をして、アジトを後にした。

セイラと会ってから、久々の外の空気だ。もうすっかりと夜になっているが、フィークは遅くまで人の流れがある。噂どおりに帝国兵がうるうるしてやがる。セイラが腕に掴まった。

「大丈夫。」

俺は安心させようとしてそう言った。しかし、女一人にこの騒ぎ・

・帝国にとつてセイラ存在は．．．なんだ？

「おい、お前ら！」

帝国兵に呼び止められる。

「何ですかー？」

「探し人のビラだ！見かけたらすぐに知らせるように！」

「はい。すぐ知らせます。」

ピックが軽く受け流す。

列車の切符を購入し、乗り込む。

「フィークが小さくなつていく。」

ピックが窓から顔を出している。子供みたいだ・・・

「どのくらいかかるの？」

「1時間くらいかな。」

会話は長くは続かなかった。最後までしゃべっていたのはピックだが、最後にはピックも黙ってしまった。そのままデッドパークに着く。デッドパークは収容所を始めとする帝国の施設が多く、民への干渉も多いので町は暗い雰囲気でした。いい噂は聞いたことがないが、噂どりのようだな・・・。

「なーんか、辛気臭いな。フィークのほうが100倍いいじゃん。」

「フィークは比較的恵まれている町だからな。こつちだ。」

俺達はイエローにしたがって、収容所の方面に繋がる森を進んでいった・・・。これが意外な重労働で、かなり俺達を疲れさせた。もう結構な時間歩いている・・・。

「ヒー・・・結構・・・遠いな。セイラ、大丈夫？」

思った以上にきつい森にピックがセイラを気遣う。しかし、セイラはケロつとした顔をしていた。

「全然平気。」

「・・・そう・・・。ねー！イエローキツイよ〜」

「だから早めに出ただろ？大丈夫だ、ほら、見てみる。」

「あ・・・！」

森は高度が高く丘のようになっていて、そこからは第6収容所が見下ろせた。四方を高い壁に囲まれた施設の中には囚人を収容するための建物が5つ・・・あとは帝国兵の建物が1つ。警備のスポットライトで照らされ、帝国兵が見回っている。ピックが呆気にとられる。

「あれが第6収容所か・・・でかいなー。」

「警備は緩いって言ってたけど、壁はかなり高く出来てるだろう。」

見取り図は何度も見せたけど一応きちんと実物を目で見させておきたかったんだ。とくにセイラはな。」

「うん。」

確かにセイラは一度だけ、計画表を見て話の流れを聞いたただけだ。俺は計画の順序を辿って確認していくことにした。

「イエロー、侵入するポイントっていうのは……。始めから流してくれるか？」

「ん。了解。あそこを見してくれ。」

イエローは刑務所の丁度裏に当たる壁を指差す。北側にあつて日が当たらないらしく、暗い。小さな裏口が付いているが、見張りが二人……。

「あれが侵入口か。見張り情報は情報だと一時間に一回交代……。で間違いないか？」

「ああ。おいピック、お前も確認しておけよ！シースもセイラもちゃんと頭に入ってるか？」

「俺は大丈夫だよ。」

シースが穏やかに答える。シースは穏やかな性格でいつもにこにこしている。

「んー……？」

セイラは良く分かってないのだろうか、イエローの話と収容所を見比べていた。大丈夫かよ……。

「はあ……。まあいいや、続きな。収容所の中、ライトがスポットライトしかないだろ？だから、タイミングを見計らって囚人の建物の中に素早く侵入する。だからあのスポットライトの動き、よく覚えておけよ。」

「んー。つまり、あの光に当たらずに建物にはいればいいの？」

「そうだ。それぞれ話したとおり入る建物は違うからな！一人一つ！」

「それで囚人の鍵を……。本当は一つ一つ開けてやりたいが、そ

んな暇はない。荒いかもしれないが、ドアにこの爆弾をくくりつけて回る。俺達がつった小型で最小限の爆発しか起こさない奴だ。大丈夫だろう。情報によると、一つの建物に20の部屋がある。ちゃんと数持つてるな？」

俺達は20個の小型爆弾を数えた。

「いいか、設定時間は30分後だ。絶対間違えるな。囚人の建物を爆発させた後に、その騒ぎに乗じてこのでかい爆弾で帝国兵の建物をドカンだ。囚人リストがあるだろうからな。それを消したいから派手に行くぜ。」

「了解。その後は・・・」

「ここの林に出来るだけ誘導する。帝国兵に追わせるな。洞窟を確保してある。入り口を隠しまえしばらくは見つからないだろう。囚人にはそこに避難してもらおう。俺達は一番見つかつちやまずい存在だ。いいか？フイーク方面行きの貨物列車だ。貨物列車だけは24時間で動いている。この貨物列車の3：58出発のものに必ず乗れ。」

「前から3両目の赤い貨物だな。」

「セイラ、さっき渡した時計を見る。」

セイラは来る前に渡した懐中時計をじっとみる。アジトで時計の説明したときに何だかちんぷんかんぷんそうだったから不安だ・・・。どうやら時計の見方も忘れてしまっているらしい。

「これ・・・？」

「そうだ、この針がここに、こっちの針がここに来たときはもう駅にいる。」

「分かった。これがここね？で、これがここ？」

「・・・。」

「・・・ウイン。帝国兵の建物爆破は俺達がやるから、ウインはセイラを連れてきてくれ。」

さすがにイエローも不安になったようだ。

「・・・その方がいいみたいだな。分かった。」

「おっと、そろそろ見張り交代の時間に合わせて、森を出るぞ。みんな、準備はいいか？」

「おう。」

「ああ。」

「了解。」

「うん！」

「第6収容所・・・ぶっ壊してやるぜ！」

episode 第6収容所襲撃計画（後書き）

ご覧いただいて本当にありがとうございました！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもございますのでぜひご覧ください！

<http://motherproject.blog.shinobi.jp/>

応援よろしくお願い致します♪

episode 10 第6収容所襲撃計画2

時間だ……。見張りが入れ替わる。

「行くぞ！」

ピックが素早く裏口の見張りの死角に入り込む。そして隙を見計らい……。気を失わせる。見張りの兵士はひざをついて前に倒れた。俺達は裏口の扉に集まる。イエローが気を失っている見張りの懐を探りながら声を潜めて言った。

「よし、次の見張りが来るまで一時間。余裕だな。おつ、鍵これか？ほらよ。」

まあその頃には見張りどころじゃないだろうからな……。俺は鍵を受け取るとゆっくりと鍵を開ける。鍵が回りきった。少しだけ扉を開いて、ライトの具合を見る。始めはピック、次はシース、セイラ、俺、イエローの順だ。ピックはちょこまかと動くから、スポットライトのン科に飛び出しそうで心配だな……。と思ったがひよいひよいと入り込んでいった。シースもとろそうに見えて淡々と入り込んでいく。そしてイエローも……。俺は扉を少し開けてセイラに見せる。

「セイラ、あの光に当たるなよ。あの建物だ。……。今だ！」

「うん！」

セイラも無事、建物の中に入る。見届ける、俺の番だ。俺は扉から一番遠い建物を担当する。ライトの動きを見計らって……。俺も無事に入り込んだ。建物に入れば死角が多く楽になるが、さて、ここからが忙しい。囚人部屋が並ぶ。ドアに用意した小型爆弾を30分後にセットし、針金で素早く、くくりつけていく。

「おい、お前何している……！」

兵士の足音。手持ちのライトに照らされる。

「悪いな。」

一気に叩き潰す。倒れこむ。今誰かを呼ばれるわけには行かない。
。。その時、囚人室から声がした。

「。。。誰がいるのか？」

囚人が今の音で気が付いたか。。。一瞬迷ったが、返事を返す。

「。。。反政府レジスタンスのものです。」

「レジスタンス?! 助けに来てくれたのか?!」

「はい。今からこの収容を爆破します。ドアを30分後に開けます。」

「本当。。。嘘みたいだよ。30分後だね?」

「はい。出口を出て北に行けば裏口があります。そこから出てく
ださい。」

「わかった。気をつける!」

そのドアを離れ、次のドア。また次のドア。見張りにはどうしても会ってしまふ。その度に倒れていく。帝国の兵だけあって、一発じゃ倒れてくれない奴もいる。全てのドアに爆弾を付け終わる。。。意外と早く終わった。次はセイラか。。。! 俺は建物から出て、セイラに任せた建物の窓から侵入する。

「き、貴様。。。!」

ちようど兵士とはちあわなせしてしまつた。。。あぶないあぶない。なるべく音を出さないように兵士の意識を奪う。セイラが物音に気づいたらしく、二階から降りてきた。

「ウイン?」

「お疲れ。終わったか?」

「うん。今最後のをつけてきた。」

「よし、行こう。もうすぐ爆発だ!」

そうして俺達は建物から離れる。。。スポットライトを避けて、兵士の住む建物の壁に隠れる。窓から様子を見ると、監視なんてし

ていないんじゃないか？つてくらいだらけた兵士がたむろしている。
「見るよ。一番働いてるのはやっぱり新人や下っ端の兵士なんだよな。」

「新人なの？さっき倒したのは。」

「緑の帽子を被っていたらどう？新人は緑。．．．みんな何かを守ろうとして、自分を誇りにしたくて入隊してくるんだよな。でも．．．失ってしまったてからいつも真実に気づく。」

「．．．ウイン？」

何感傷に浸ってるんだ。今はそんなこと言っている場合じゃない。我に帰って、壁に爆弾をセットした。そのとき低い声が．．．

「おい、終わったか？」

「うわ．．．!!」

後ろからこつそりとイエローが現れた。

「．．．驚かすなよ。」

「お、お前こそでかい声出すなよ！俺も向こう側につけたからなあと一つ、真ん中につければ．．．」

「おい!!誰かいるのか?!!」

声を出したので兵士に見つかってしまった。

「やべ．．．!!」

「ウインがでかい声出すから。あーあ」

．．．やれやれ、と思いつつ俺は剣を構えた。

「侵入者だ!!おい!!皆!!」

「捕らえろ!!」 兵士が5人。実戦慣れしていない新人が4人と中級の青帽子が一人。まだ爆弾セット終わっていないのに！俺は向こうの構えを待たずに手前にいた新人を薙ぎ倒した。

「ぎゃ、あああつ!!血．．．血が!!」

「血くらいで騒ぐな!!」

「でも隊長．．．!!自分達は実戦は初めてで．．．!ぎゃつ!!」

俺が兵士を攻撃したのを見て、セイラも切り込んでいた。あまり

の身軽さにイエローがおどろいている。

その時、囚人の建物から細かい爆発音が響いた。

「な、何だ?!」

人々の声とともに、建物から逃げ出す人々……。

イエローがニヤニヤしながら眺めている。

「いいね。時間バツチリだ。」

「貴様ら、囚人達を逃がしたのか……!!何てことを!!!」

「うるせえよ!罪もねえ人間を閉じ込めやがって!!政府の犬が
!..」

イエローが兵士に斬りかかる。

「ひ、ひいつ!!」

「ツ……強い!!」

「隊長、自分達では無理です……!!」

「……こいつらに構ってられるか!!囚人どもを止める!!」

「はいっ!隊長!!」

兵士達は、俺達より囚人を止めるほうを選んだらしい。俺達を残して去っていく。

「イエロー、先に裏口に回って人々を誘導してくれ。俺はもう一つ爆弾セツトしていく。この建物は囚人リストがある。木っ端微塵に……だろ?」

「分かった。じゃあ、セイラも連れていくぞ。」

「ああ。」

「行こう。」

「……私はウィンといたい。」

「おいおい。危険だからイエローと行くんだ。」

「……。」

「……すごく不満そうだ……。」

「まあ、さっきのを見ると相当腕も立つみたいだし、ウィンも一人だと何かあったら危険だ。セイラも一緒に連れて行けよ。」

・・・やれやれ。お守りじゃないか・・・。

「じゃあ、俺は行く。お前ら、遅れるなよ!!」

「ああ! すぐに行く!」

イエローの背中を見送って、急いで最後の爆弾をセットする。

「いいか、すぐに爆発だ。急いで離れろ!」

「うん!!」

セットした・・・!!

「セイラ走れ!!! あの建物の影だ!!」

爆音だ。かなり広範囲に爆発した。ガラスやら耐え者の破片やら色んなものが飛び散る。

「耳が・・・」

「すぐ治る。行こう!」

しかし、裏口は想像以上に逃げ惑う人波が激しかった。兵士も建物が爆発したことで身の危険を感じ、任務を放って逃げている。解放された人々はイエローが用意した洞窟に向かっていく・・・。

「ウイ、ウイン!!!」

セイラの声。伸ばされた手に届かない。見えなくなりそうだ。

「・・・クソ!!」

俺は何とかセイラの手を取ったが流れに弾き飛ばされた。イエローたちはちゃんとこの人波をぬけたのだろうか? しかし、そろそろ列車の時間だ・・・表の門はしっかりと鍵が掛けられてしまっている。ここしか出口はないのに・・・!!

「まずいな。時間が無い・・・。」

「ウイン!!! こつち!!」

セイラが俺の手を離して、裏口とは逆のほうに走り出す。そこにはまだ破壊されていない、監視のために使うのだろうか? 高い鉄塔に飛びついた。俺は追う。セイラが鉄塔に登りながら地上にいる俺に

叫んだ。

「ウイン！こつち！！上に来て！」

「おい！待て！どこに・・・早く逃げなくちゃいけないんだ！塔に登っている暇なんてない！」

「もう時間がないもの！」

なにかかんがえがあるのか？！もう賭けだな。塔の上まで来た。かなり高い・・・普通なら落ちたらこれは死ぬな・・・

「ウイン、あの堀の上・・・！あそこなら飛び越えて外に出れるでしょ？」

「・・・あそこって・・・。」

塔のてっぺんからみても高い位置にそびえる壁・・・セイラなら跳べるかもしれない。確かにもうここから脱出できるかもしれない。入り口で兵士を倒しながらじゃ時間が無い！

「ウイン、行こう！！！」

「・・・分かった！」

「うん！」

セイラがふわりと跳ぶ。壁の上に軽く足を付く。やっぱり余裕だな・・・であつたときに見せたあの跳躍力・・・あのときよりも高さはある・・・。

続いて俺だ。その時、大きな音とともに塔が揺らぐ。下が爆破されたんだ。足場が定まらない・・・しかし、ここにいれば巻き込まれる！！

「くそお！！！！」

俺は跳んだ。飛びながら剣を抜く。・・・あと少し届かない！

「ぐっ、おおお！！！！」

鈍い音がした。堀に剣を刺し、落下は免れた。壁の石の欠片が落ちる。少し足りなかったようだ。壁にぶら下がっている状態から持ち直そうともがく・・・そこにセイラが手を伸ばした。

その手を掴む。セイラは力はそのままでないらしく俺を引き上げることは出来なかったが俺は壁を伝い、セイラの手を支えられて、体制を持ち直した。目の前で塔が炎上し、朽ちて行く。

「は．．．ぎりぎりだな。」

「良かった．．．」

セイラが大きなため息をつく。

「いや、落ち着いてられないぜ！セイラ！降りるぞ！！」

「うん！」

俺は剣で開けた穴に爆弾を結んでいたロープを余った針金でくくりつける。そこまで強くないロープだが．．．地上まで持つてくれよ．．．。

「セイラ！これを伝って降りろ！」

セイラは言われたとおりに降りる．．．ロープがぎしぎし音を上げる。セイラが地上に着いたのを見届け、俺もロープを伝った。何とかロープは持つてくれたらしい。

「こっちだ！」

セイラを誘導して駅までの道を走る。兵士は俺達を捕まえるどころではなく、スムーズに駅まで来たが．．．。

「あ！！！！！」

「ウイン、列車が！」

「くそ！間に合わなかったか．．．！！」

約束の貨物列車が動き出した。

―列車の中―

「イエロー．．．二人が．．．」

「ああ．．．」

「何かに巻き込まれたのかな．．．？それとも．．．死．．．」

『勝手に殺すなよ』

「?!・・・?!」

貨物列車の上の窓をこじ開ける。セイラを先に中に放り込んだ。

「セイラ!!!じゃあ・・・!」

「俺もいる・・・っと!」

「二人とも!!!生きてたのか!すげえ心配したんだぞ!」

ピックが今にも泣き出しそうだ。何か心配させたらしいな・・・
当然か。俺はピックの頭をぽんぽんしてやった。

「心配させて悪かったな。」

それを見ていたセイラが、俺の真似をしてイエローの頭を撫でた。

「・・・心配させて悪かったな。」

イエローが苦笑いする。

貨物列車は窓がないけら外は見えなかったけれど、時計はもうすぐ朝の4時半になろうとしていた。俺達は汚れてしまつてボロボロだったけど、5人とも無事だった。それでもただ作戦成功だ、と笑つてられないのは、誰も口にはしないけど俺達が起こしたこの騒ぎで兵士でも囚人でも命を失った人がいることが皆分かつていたからだと思う。

兵士の家族から見れば俺達のしていることは帝国にされたことと変わりはないのなら・・・それを考えると何も出来なくなる。だから俺は早くこの場を去りたかつたし、あまり多くを口にしたくなかつた。

俺は列車が時間を見計らつて、鉄の窓を開けた。朝日に目が眩んだ。見慣れた風景・・・フィークだ。俺達はあれから列車の中で何も話さなかつた。眠りもしなかつた。それぞれ、何を考えていたんだろうと思う。

「・・・行こう。」

朝方に活動を始める商人たちに紛れ、アジトの・・・古びた道具屋のドアを開けると、ヒナが店番をしていた。

「みんな・・・」

「ヒナ、ただいま。」

イエローが笑って言った。

ヒナが涙目だ。

「イエロー・・・皆・・・無事でよかった・・・。眠れなくて・・・私だけじゃないわ。早くアジトに入って。みんな！！イエローたちに戻ったわ！」

店頭からアジトへは戸棚の裏にある階段から行ける。階段を降りるとメンバーが待っていた。

「お疲れ様、リーダー！」

「みんなお帰り！」

「よく無事で！」

「みんなのおかげだよ。」

俺はメンバーと軽く話した後に、水を持ってそのまま寝室に行った。ベッドの横に荷物を置く。俺は荷物から小さなビンに入った薬を取り出した。もう残り少ない。買いに行かないと・・・襲撃の計画が終わって、ハンターに行ったときにでも。そんなことを考えながら薬を飲み下す。ベッドに仰向けになって見慣れた天井を見つめる。帰ってきたんだ・・・俺は、まだ、生きている。

<http://blog.with2.net/link.php?383750>

読んでいただいてありがとうございます♪宜しければクリック
お願い致します♪ご意見・ご感想もお待ちしております♪

episode 11 第4収容所襲撃計画

第4収容所は第6収容所に比べると、罪の重い囚人が入るので警備も重くなっている。帝国イリユーク。第6収容所よりも遠くにある。今回は混乱に乗じるために休む暇なんてない。イリユークはデッドパークほどの敷地はないがビルのような、13階の高い塔のような石造りになっている。前回と計画自体はあまり変わらない。1、2階と12、13階は兵士の階だ。最後に塔を崩して終わり・・・という感じだ。

「とりあえず、全員で1、2階の兵を片付ける。そのあと全ての階のドアに昨日と一緒だな。これをとりにつけていく・・・分かったか？」

「今回は形が違うからな。大丈夫かな？」

「第6収容所の片づけでそこまで人事は十分でないはずだ。ある意味でチャンスなんだ！」

「そうかなあ。」

「とりあえず、3、4階はシース、5、6階はピック、7、8階はウイン、9階はセイラ、10階は俺が担当だ。」

「非常用の鉄の階段から行くから、上階の担当の方が登るまできついが・・・数はこなさなくてもいい。」

「ん。了解。」

「爆弾足りるのか？」

「今作っている。」

連続での襲撃計画は結構ドタバタだ。俺はあのあと少しだけ眠った。それでまた会議やら爆弾作りやらをしていた。きつと皆あまり寝ていないだろう。いや、・・・眠れたわけがない。そして俺達は、そのまま列車に3時間揺られ、イリ

ユークに着いていた。昨日の疲れも癒えていないがやるしかない・・。

「行け!!」

俺達は昨日とは変わった襲撃作戦で、収容所を奇襲した。さすがに新人ばかりは置かないか・・。昨日よりは確実に腕の立つ兵がいる。まとめて縛り上げて通報できないようにする。1、2階を占拠すると、俺達は各階に散った。

同じく爆弾をくりつけていく。俺は2階分担当だから急がないと・・・!

「うわあああ!!!!」

叫び声だ!!誰だ?!下の階・・!!ピックアップか!!俺は急いで階段を駆け下りた。

「ピックアップ!!どうした!!」

「ウイン!!チルドレンが・・!!」

「この!!」

俺はチルドレンを塔の外に剣で切り捨てた。

「悪い・・油断した・・まだいるぞ!気をつけてくれ!」

「ああ。大丈夫か?しかし何でチルドレンが?」

「分からない・・。」

「!!!!やばい!!!ピックアップ!!!伏せろ!!!」

「え?!」

「いいから!!!」

ウインがピックアップの頭をわしづかんで押し伏せた。その瞬間、くくりつけた爆弾が爆発した!!!!

「う、うわあ!!」

爆風で飛ばされそうになる。

「な、なんで・・?!!タイマーは30分後だし、こんなに大きい爆発は・・。」

「チルドレンが爆弾を齧ってたんだ！体液に引火した！誘爆する！！逃げる！！」

「ま、まじ〜？！」

続いて爆発が続く。爆発は予想以上の大きさだ。どうやら雲行きがよくない。

「まずいな・・・これじゃ最上階の兵士に気づかれる・・・！イエローが・・・！」

「うわあああ！！チ、チルドレンが・・・！！」

「シースの声だ！！」

「くそっ！！」

――10階

「イエロー！！どこにいるの？！」

セイラはイエローの声を聞き10階にいた。煙が上がってくる。

「テロリストだ！！！！」

「やれ！！殺せ！！」

「女だ！！」

セイラは剣で兵士を切っていくが、数が多く、下の階から上がってくる煙も濃くなっていた。

「っ！！」

咳き込んだ隙に、セイラの腕から剣が弾き飛ばされた。

「今だ！！やっちまえ！！」

後ずさり、金網に黒髪にカツラが引つかかる。そのままずりりとカツラが取れ、金の髪が露になった。

「！！お前・・・！！」

兵士がセイラの髪を驚づかみにする。

「やつ・・・!!」

「金髪・・・金の目!! 貴様、政府のお尋ね者だろう!? 何でこんなところにいるかは知らないが、お前を生け捕れば・・・謝礼がもらえるって話だぜ!」

「離して!」

「おとなしくしろ!!」

兵士は警備の為持っていたスプレーを懐から取り出し、セイラの顔に手掛けた。

「・・・っ!!」

頭がぐらりとする。そこに兵士から腹部に拳が入れられ、セイラはそのまま前に倒れこんだ。

誘爆が止まらない。上階も爆発し始めた。

「くそ・・・!!」

「もうだめだ。撤退だ!!」

「でも・・・イエローとセイラが・・・!!」

「・・・俺が行く。」

「?! 間にあうのか!?!」

「ピック・・・いいから、行ってくれ。みんなによろしく伝えてくれ。」

「ウイン!! 待て!! お前も・・・死んじゃうかもしれないんだぞ?! 俺は、嫌だ! やだよ!!」

「イエローはウィッシュテールのリーダーだ。こんなところで死なせない。・・・セイラは覚えていないかもしれないけど、借りがあるんだ。それに、俺は・・・守るっていったんだ。あいつに。」

「ウイン!!」

「頼んだぞ! ピック! 生きて帰れよ!! 生き残ったら必ず連絡するから・・・!!」

「ウーーーーー!!」

―最上階―

「キデイ様！！偵察のところ申し訳ございませんが、テロです！急遽お逃げください！！」

「何だと？！さつさと片付けろ！！」

「いや・・・もうこの収容所はだめです！！」

「何だと？！」

「キデイ様！！」

「何だこんな時に！！キデイ様は今から避難されるんだ！！後にしろ！！」

「あ、いや、もうしわけございません・・・！政府指定の探し人を発見いたしました・・・！」

「探し人？よくやったが、私の管轄ではないな。」

「そうだ！こんな時に！貴様もさつさと避難するんだ！！」

「で、でも金髪の女で・・・謝礼をいただけると・・・」

「金髪の女だと？！どこにいる？！連れて来い！！」

「はい！！こちらに！！よいしょ・・・眠らせたのですが・・・」

「キデイ様、しかしこの塔はもう・・・」

「・・・確かに・・・この顔だ。ははは・・・とうとう戻ってきたか。」

「・・・キデイ様？」

「屋上に救助をよべ。彼女もマテリアルに連れ帰る。」

「は、はい！！！！」

「しかし・・・こんなところでまたお前に会えるとは・・・。」

「キデイ様、この女は・・・お尋ね者では？」

「ふふ。君には政府から謝礼が出るだろう。」

「ほ、ホントですかー！！」

人がところどころに倒れている……。それを横目に俺は鉄の階段を駆け上った。セイラ……。！イエロー！どこだ……。？！爆発音が響いている。自分の仕掛けた爆弾が自分の命を脅かすなんておかしな話だな。

俺は無言で兵士を薙ぎ払った。声もなく、地上に落ちていく。左目が……。心臓が熱い。俺を止めないでくれ。今は、手加減なんて出来そうにない。体中が煮えたぎっているようだ。

不思議と、俺はセイラが居る方向が分かっていたような気がした。何故かセイラの気配を感じていた。だからただひたすらに邪魔をする者を切り払って、上を目指していた。最上階……。！！ドアを開ける。そこに……。セイラがいた！！

「……。！セイラを……。放せ……。！！」

「……。な、何だ貴様は！！キディ様、お下がりください！」

「その返り血、テロリストか？！この女の仲間か？！」

「彼女を……。離せと言ってるんだ！！！」

俺は兵士に切りかかった。一気につぶす！！！！二人の兵士を切り倒し、奥の偉そうな男の首に狙いを定める……。！！

「何？！」

「これは早いな……。貴様、何者だ？」

「……。今のは……。？」

確実に剣は当たっていたはずだった……。だが何か柔らかいものに……。弾かれた……。！！

「うん？貴様……。レッドアイか。ネームとコードナンバーを言え。任務を間違っではないかね？」

「俺は政府の犬じゃない！！！」

「おかしいな。……。貴様は……。！」

「うるさい！！！」

奴の手から何かが……。触手のようなものが伸びて、俺は首を掴

まれて壁に叩きつけられた。

「ゴホっ・・・な・・・っ」

良く見ると、奴の腕には見たことのないチルドレンが巻きついて
いる。チルドレンを操っているのか・・・?! まさか・・・そんな
ことが可能なのか?

「・・・意思があるのか?・・・なんだ貴様は? レッドアイでは
ないのか?」

「は・・・離せ!!!」

「暴れるな。この触手はそう簡単には・・・」

「うおおおおお!!!」

俺は触手を両手で千切り剥がした。チルドレンの体液があたりに
飛び散る。剣を拾う。こいつは何だ?! チルドレンを自在に操るな
んて・・・!!!

「貴様!!!」

セイラを抱き起こす。何かやられたのか、これだけの騒ぎの中で
目を覚まさない・・・!

「セイラ!!! 起きろ!!!」

「その女は渡さん!!!」

「・・・何故セイラを狙うんだ?!」

「貴様には関係のないことだ! 貴様はここで死ぬのだから!!!」
左手にもチルドレンを仕込んでやがる・・・!!! 触手が俺えてお
こうに向かう。避けきれない・・・! 剣で防げるかどうか・・・!
! その時、セイラが目を見開いた。一瞬火花が散った気がした。バ
チッという音と共に、剣に当たる前に触手が弾かれた!

「?!」

何が起こったんだ?! とりあえず助かった・・・! 俺は間髪いれ
ず奴に斬り込んだ。

「ぐあああああ!!!」

止めを刺してやりたいが、もう時間がない!!!

「うい、ウイン・・・。」

「大丈夫か?! セイラ、イエローは?!」

「ごめんね。イエローはいなくて・・・」

「そうか・・・分かった、逃げるぞ!!」

「貴様、ただで済むと思うな!! 絶対に殺してやるからな!!」
その時、建物が大きく揺れた。崩れ始めたんだ・・・!! 下に降りるか・・・!! しかしもう時間が・・・!!

「ウイン・・・。みんなは? イエローは?」

「・・・心配するな。皆無事に逃げた!」

「そう・・・良かった。」

「次は、俺達が逃げるんだ!」

俺は屋上の鍵を壊した。政府の施設なら戦闘機の一つくらい・・・と思っただけ、かなり古い飛行型戦闘機が置いてあった。皆逃げ出す時に立派なものは使ってしまったんだろう。当然か。

「乗れ!! セイラ!」

錆付いたドアを開け、セイラを乗せる。

「頼むぜ・・・」

鍵穴を壊して回し、スイッチを入れる。ガラガラと頼りない音を立てて羽根が回りだす。一応戦闘機の操縦は兵士の時に勉強した・・・が、型が古すぎて余りよくわからない・・・。燃料はあまりないが、飛ぶくらいはあるだろう・・・。ここにいたら確実に終わるだ!!

「いくぞ!! しっかり掴まってる!」

古い飛行型戦闘機はぐらつきながらも飛び立った。

「ウイン、すごい・・・! 飛んでる!」

「ああ・・・。」

炎上する第4収容所に夜の街は照らされていた。手の力が抜ける。体中が心臓になったようだ。熱い。

「ウイン・・・?」

俺は、操縦官をもつ手が震えるのを感じた。景色が霞んでいく。

「ウィン！？」

セイラの声が、遠くに感じた。

「ウィン！！！！起きて・・・！！！！」

最後まで読んでいただいてありがとうございました！！良かったら・
・人気ブログランキングをクリックお願い致します。本当にがんばります。よろしくお願い致します。

[http://blog.with2.net/link.php
?383750](http://blog.with2.net/link.php?383750)

episode 1 第4収容所襲撃計画 (後書き)

ご覧いただきありがとうございます！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもございますのでぜひご覧ください！

<http://motherproject.blog.shinobi.jp/>

応援よろしくお願い致します！

episode 12 不完全な体

―俺は、死ぬのか？

―俺は、何なんだ？

―どうしてこうなったんだろう？

―ここからは出られない。

―俺は・・・必要とされなかったから。どこにもいけはしないのか・・・？

『だいじょうぶ』

そうして差し出された小さな手は、俺の冷え切ってしまった手には酷く暖かく感じた。

―君は・・・？誰・・・？

目を開けると、そこには俺の顔を覗き込むセイラがいた。

「・・・？・・・セイラ・・・？」

「ウイン・・・良かった・・・生きてた・・・」

起き上がろうとすると、体中が痛んだ。

「いつ・・・。」

「ほれ、あまり無理するんじゃない。」

起き上がるのを諦め、首だけ動かして声をするほうを見る。・・・

白髪のじいさんが立っている。誰だ？

「・・・あの・・・あなたは・・・」

「わしはこの村の医師のモリスじゃ。安心しろ。治療はしておい
たよ。」

「ウイン、あのね、モリスさんが助けてくれたの。」

「・・・話を一気にされて分らない。どうということだ??それから
順序を追ってセイラに話を聞いた。」

つまり、こういうことだ。おれは飛行機の操縦をしながら気を失
ってしまったらしい。セイラがいくら呼びかけても返事はなく、飛
行機の操縦を俺の代わりにセイラがした。しばらく持ちこたえては
いたものの、バランスを崩して落下したところが運よく海だった。
その時近くにいたのが釣りを趣味としているこのハリヤ村の医師、
モリスじいさんと、俺達を拾って治療までしてくれた・・・という
わけらしい。

セイラもよくみたら擦り傷だらけだが、大した怪我はしていなか
った。俺も打撲が殆どだということだ。しかしさすがにまだ動けな
いな・・・全身ズキズキしている。

「ウイン、大丈夫?」

「ああ・・・動けるようになったらすぐに行こう。生き残ってる
のが奇跡だ。」

「うん・・・」

「おい、薬草を取りに行くのを手伝ってくれんか!」

「あ、はい!じゃあウイン、モリスさんのお手伝いしてくるね。」

「ん。ああ・・・」

セイラの話では3日、気を失っていたらしい。大分うなされてい
たようだ・・・。ピクとシー스는無事に列車に乗れたのだろうか。
・・・?イエローは見つけられなかったが・・・塔から脱出できたの
だろうか・・・?キディといった、あの男はどうなったのか・・・。

第4収容所襲撃計画は見事に失敗した。収容所は確かに崩壊したが、囚人は殆どが亡くなっただろう。帝国の兵士も……。俺達が……殺したんだ……。

俺はそのまま眠った。体がつかれきっていたのだろう。夜、薬草の粥を食べるために起こされたが、そのあと朝まで一度も起きることなく眠った……。

そして、そのまま朝を迎えた。横のベッドではセイラが眠っていた。擦り傷だけといていたがすっかりいいようだ。俺の体も昨日と比べると随分と痛まなくなった。もう、動けるはずだ……。あれだけの騒ぎを起こした後だ。早くアジトに戻って無事を伝えなければいけない。セイラの事を通報されてもこの体じゃ十分に戦えない。早く立ち去ろう。

「セイラ、起きろ。」

「んー……。ウイン……。もういいの？」

「随分な。行こう。とりあえずここを出るんだ。」

「？もう？」

「ああ、早く……。」

「こらこら。まだ退院許可を出しておらんぞ。」

もう起きてたかじいさん……。さすが年よりは朝が早い。

「お世話になりました。すいません。行くところがあるんです。」

「小さな村だが一応医師じゃ。おぬしを治す義務がある。それに、ききたいこともあるんじゃ。座りなさい。」

「……。」

「……言うことを聞いておくか。」

「ふむ。体の打撲はもうほとんどいいようじゃな……。あと、上着を脱ぎんさい。」

モリスは俺の胸に聴診器を当てて、心音を聴いている。

「ふむ……。後ろを向いて。……。ふむ。いいじゃろう。」

聴診器を降ろしたモリスはふう、とため息をついた。

「お主が気を失ったわけは……。ここじゃろう。」

モリスは俺の左胸を指差した。

「お主が寝てるときにお主が持っていたこの薬……。これと同じ薬を点滴で入れさせてもらったよ。」

……。そうか……。だから随分と楽なのか……。

「……。助かりました。ありがとうございます。」

「自分で分かっているとと思うが、これはかなり強い心臓の薬だ。」

「……。はい。分かっています。」

「しかし、お主の心臓を診察してみたところ、本当の心臓病つてわけではないね。」

「……。ありがとうございます。あとは失礼します。」

俺は話を中断して席を立とうとした。俺の体の事が普通の医者に判るわけがない……。今までどれ程の医者がさじを投げた事が。

「待ちんさい。お主の体の事だ。悪いようには絶対せん。……

お嬢さんも聞いておきなさい。彼というなら。」

……。モリスの強い目に押され、俺は半分腰を上げた席にもういちど着いた。

「何故心臓病でもないのにこんな強い薬を飲む？」

「……。心臓が、熱く、早くなって苦しくなるんです。痛みも激しい。……。年々酷くなってます。」

「それは……。お主のその瞳と関係あるのか？それは……。レツドアイという、帝国の兵士のものではないのか？」

「……。」

「お主を見つけたとき、痙攣を起こしていた。心臓と……。左目を抑えて苦しんでいた。目は、熱を持って血が滲んでいた。わしは眼球が傷ついているのかと思ってみてみたが……。傷は無かった。」

血の・・涙だったんだ。それに飛行機が墜落して、おぬしは酷い怪我だったんだ。わしが見つけた3日前は。今は・・全身打撲程度にまで傷が治っている。こちらのお嬢さんもだ。お主ほど酷い怪我ではなかったが・・・3日でここまで回復するのは・・・。医者を目から見れば異常じゃ。」

このじいさん、お見通か・・・。

「俺は確かにレッドアイですが・・・

不完全なレッドアイなんです。」

「不完全も・・・？レッドアイ“赤い英雄達”じゃろう？戦といえば彼らを取り上げられる。それに完全も不完全もあるのかね・・・？」

「・・・そうですね。レッドアイは英雄と称えられ、一般の方から見れば憧れにもなっています。俺もレッドアイに憧れて帝国の兵士になったんです。」

「この村で憧れるものも多いよ。子供達は特にな。優秀と認められた兵士はレッドアイになれる、と。わしから見れば兵士もレッドアイも変わらない。戦などただの殺し合いじゃ。・・・。」

「・・・モリスさん？」

セイラがうな垂れたモリスを心配する。このじいさん、どうしてここまで・・・？

「わしの息子は・・・12年前に帝国の兵士になったんじゃ。」

「！・・・まさか・・・。」

「“レッドアイに選ばれた”・・・その手紙が着てから・・・息子は帰ってこない・・・。英雄となって・・・忙しくて帰ってこれないのかと思っていた。手紙も出せないのかと思っていた・・・。だから、お主を見つけたとき・・・わしは・・・。いつたい、どうなってるんだ？レッドアイとは・・・。頼む・・・教えてくれ・・・。」

「・・・モリスさん。」

・・・息子が・・・12年も前か・・・恐らく・・・
「俺が・・・知ってることの全てです。俺が・・・レッドアイになつた時のこと・・・」

―4年前―

帝国ビルiasにそびえるに白いビル・・・国立研究所マテリアル。食品から兵器まで、世の中の科学の最先端が集結している。俺達はこの日、レッドアイになるためにマテリアルに連れてこられた。その門は大きく、くぐれることを誇りに感じた。ここから出てくる時、俺達は英雄の証である紅い瞳を手に入れている。そう、信じていたから。

俺はレオと他の候補者達と、待合室らしい部屋で待たされていた。白い壁に白いタイル。全てが真っ白で清掃されている。研究室の外は普通の会社のようなのだが、研究員はやはり白い白衣に身を包んでいる。

「えー、レッドアイ軍候補に選ばれた兵士諸君。よく来てくれた。私がレッドアイの担当ビットだ。」

白衣に、メガネの小太りの研究員が奥から現れる。

「はい！！！！よろしくお願い致します！！」

「ははは。元気がいいね。いいことだ。さて、早速はじめよう。

着いてきてくれ。」

ビットは一番奥にあるエレベーターに鍵を刺す。なぜわざわざこのエレベーターを？俺は少し疑問に感じたが、さほど気にせずエレベーターに乗った。そのままエレベーターは降りていった。地下なのか・・・？

エレベーターが開くと、人気の無い廊下にドアがいくつか並んだ。

さつきと違い、証明は少し暗く感じた。そして少し温度が低く感じた。

「・・・なんか、怖いですね。」
ビットが振り向く。

「ははは。大丈夫。地下だからそう感じるのかもしれないね。」
ビットが鉄製のドアを開ける。金属音を立ててドアが開く・・・。
そこには白衣を着た研究員が数人と、簡素な・・・手術用のベッドがあつた。

「なっ・・・?!」

「では、ここにそれぞれ横になりなさい。」

「ビットさん・・・これは？」

「いいから横になりなさい。レッドアイになるために必要なことだ。」

「でも・・・」

「命令だ。」

俺達はレッドアイになるために何をするのか、何をされるのかは何も聞かされていなかった。だからそのベッドを見てかなり動揺した。

「大丈夫。ほんの一瞬だ。」

俺達はベッドに横にさせられる・・・。体を拘束され・・・動けない。何だ？何が・・・。そして研究員が固定された俺の腕に・・・注射が刺された。

「っ!!」

「大丈夫だ・・・苦しいのは一瞬だ。あとは何も感じなくなる。」
何も・・・?!体が・・・おかしい・・・!!熱い・・・痛・・・
い!!!

『うわあああああああ——————!!!!!!』

俺は激痛が走る体で転げ回った。
酷い力が出たのだろっ。拘束具が外れてベッドから落ちていたのだ。

ただ痛みには耐え切れず叫んでいた
全身が焼けるように熱かった。
左目が取れて落ちそうだった。

『ああああああ……！！！！
れ、レオ！！レオ……！！』

俺は隣のベッドにいたレオを探した。だがそこに、レオはいなかった。そこにいたのは……レオじゃなかった。
床を這いずり回っていた俺の視界には、瞳が紅く染まった、そしてその目が巨大化し眼球から飛び出したまま動かない……さっきまでレオだったものだった。

「う……うぎゃああああああ！！！！！！！！」

俺は痛みと驚きと恐怖で叫んだ。その部屋の、奥のドアが少しだけ開いていた。その奥の部屋からは人間の

手が見えた。何体か……死体が放置されている……！！！！！！レ
ッドアイになるために……これは……何なんだ？！？！動かな
くなったレオを見下ろして研究員達の会話が聞こえる。

「もうだめだなこれは。廃棄だ。」

「そっちはどうだ？」

のた打ち回る俺を研究員達が上から覗き込む。

「うつ、ぐうつうつ、……がああ……。はあ、はあ、はあ……」

「どうだ？それは？もう10分だ。」

「落ち着いてはきましたが……痛みがあるようですね。」

「眼球が左しか赤くなっていない。」

「惜しいが・・・失敗だな。」

「廃棄だ。」

「この2体は、先の失敗作と一緒に焼却炉に」

「はい。」

「はあはあはあはあはあはあはあはあはあ・・・」

は・・・廃棄・・・？

俺は痛みは治まったが、今度は動機が止まらなくなっていた。奥の部屋へと研究員に足を引きずられる。奥の部屋にあった死体の上に無造作に投げられる。そこから、思い通りに動かない体で、部屋の様子を見ていた。

「そっちは？」

「成功だ！！」

「2体か。こんなものだな。」

俺達と一緒に来た二人だ。拘束具が外される。目が赤くなっているが・・・目に光が無い。表情がない。

「よし。付ける。」

ビットが命じ、研究員が二人の首に、金属の首輪のようなものをつけた。

「つけました！」

「よし！立て！」

二人はむくりと立ち上がった。両目から血が流れている。鼻血と涎が流れているが、拭こうともしない。

「よし！いくぞ！」

ビットと研究員と二人が部屋から立ち去る。研究員が二人、残った。一人がレオだったものの足を持つ。もう一人が俺の脚を持つ。そのまま引きずられる。俺は体が麻痺して、動けなかった。ただただ荒い呼吸を繰り返していた。

「・・・こいつ生きてるぜ。」

「どうせすぐ死ぬ。」

「そうだな。」

研究員が俺を見てそんな会話をして・・・そのまま俺は、ダストシュートの中に落とされた。随分高いところから落ちたが、レオの体の上に俺は落ちたので無事だったようだ。

俺は、焼却炉の中、廃棄物として投げ込まれた死体に埋もれながら、少しずつ体が楽になってきたのを感じた。動機は治まったし、左目の出血は止まった。麻痺は少しずつ痺れに変わり、体が自由になってきた。そして――どのくらい時間が経ったのかは分からないが、俺は生きているものが他にない焼却炉に立ちあがっていた。

――俺は、レッドアイになれなかった。

そして憧れていたレッドアイは、人間としての意思は失くしていた。

レオは死に、俺は失敗作として、廃棄物として焼却炉に投げ込まれた。

そして残ったのは、不完全な紅い左目と壊れかけた肉体。

人間とはいえない体を引きずって、それでも、俺は生きたいと思った――。

episode 12 不完全な体（後書き）

最後までご覧いただきありがとうございます！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもごさいますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します！がんばります！

episode 13 歩き続けて

俺は、話し終わったときモリスの顔を見ないようにしていた。
レッドアイへの「改造」。あれは奴らの話も合わせて成功率は50パーセントだ……。それに、もし成功したとしても……。

「……息子は……。それじゃやはり……」

「……もう……」

― 戻ることはないだろう。

「……。分かっていたんじゃ……。もう、息子は戻らないと……。親思いの……。いい子じゃった。」

「モリスさん……」

セイラは涙目になって顔を伏せた。俺はなんて言っていないか分からないくて、黙っていた。

「すいませんでした……。知らないほうが……」
すると、モリスが顔を上げる。

「……。いや、教えて欲しいと頼んだのはわしじゃ。それに本当の事が分かってよかった。そう。よかったんじゃ。」

「しかし、お主は大変じゃな……」

「……。治すことは、出来るんでしょうか？」

「何とも言えんな……」

「やはりそうですか……」

モリスが立ち上がって、棚をさがさとして何かを取り出す。それを俺の手に乗せた。それは紙に包まれた薬だった。

「一応お主が持っていた薬を処方しよう。」

「ありがとうございます……。これは？」

渡された薬は2種類で、俺が持っていたのとはまた色の違う薬だ。

「それとまた違う種類の……。薬は一種類だけではない。一番

体に合うものが見つければいいんじゃないが。機会があつたら、ボツシュに行つて見なさい。」

「・・・ありがとうございます。ボツシュ・・・一度行こうとは思っているのですが・・・。」

「あそこなら医療が発達している。」

「分かりました。」

「それと、そう簡単には入れないが・・・。マテリアルで打たれたその薬の正体が分ければ・・・。」

「・・・治るんですか？」

「確かなことは言えないが・・・。」

やはり、マテリアルに行く必要があるのか・・・。俺はもらった薬をしっかりとしまった。

「完全に治りはしなくても今よりはいい治療はできるだろう。何だかんだ言つても、マテリアルは最先端の技術を持っている。・・・世間には公に出来ないような技術もな。お主や、私の息子もその犠牲者じゃ・・・。」

「政府は今もその犠牲を出し続けている。俺は・・・それが許せない。」

「昨日のイリユークで起きたテロというのは、おぬし達が・・・？」

「・・・通報しないんですか？」

「・・・せんよ。帝国に皆従っているのは恐ろしいからじゃ。誰もが力で従わされている。」

「ありがとうございます。」

「礼を言うはわしの方じゃ。お主達のようなものがいなかったら、帝国の勢いは増すばかりであろう。わしは息子をそんな目に合わされた帝国が・・・憎くてたまらん。しかしこの老いばれに何が出来るじやろう。」

そう言つて、モリスは頭を下げた。

―それでも俺は、人をたくさん殺してきた。

「彼女もこの回復力は・・・マテリアルから？お主のような肉体的な障害は無いようだが。」

「・・・彼女は記憶が無いんです。」

モリスがセイラに尋ねる。

「記憶が・・・？何もか？」

「・・・覚えてない。」

「何でもいい。何か・・・」

「あ・・・でも・・・」

「でも？」

「何だか・・・この村は懐かしいような気がする。」

「ふむ。記憶を失くす前に住んでいた場所と似てるのかもしれない。頭痛はせんか？」

モリスがセイラに色々と質問をしている。質問が落ち着いた後、俺はモリスに尋ねてみた。

「結局・・・記憶喪失というのは、治るんでしょうか？」

「治ることもあるが、治らないこともある・・・。精神的なものもあるのかもしれない。」

セイラが少し間を置いて、言った。

「・・・それでも、私は私を知りたい。」

セイラは俺の目をしっかりと言った。

「・・・大丈夫。戻るさ。一緒に探そう。」

何にも考えていないかと思っていたが、セイラは、不安なのかもしれない。そうだな。いきなり知らない奴に拾われて、知らない奴らに狙われて。

―それに本当の事が分かってよかった。そう。よかったんじゃ―モリスはそう言った。

それがどんなに辛いことでも、知らないよりは知ったほうがい

いのか？

忘れてしまいたいことは多すぎる。それは、きっと俺だけじゃない・・・誰もがそうなんだろう。でも全てを忘れてしまうということは酷く恐ろしいことなのかもしれない。例えば思い出すことで酷く傷ついても、何かを失ってしまっても、記憶は必要なものなのかもしれない・・・。

診療所を後にし、俺達はモリスから道を聞いて村の郵便屋まで歩いてきた。村には若者の姿は殆どなく、かなりの田舎だ。海沿いだから、そこだけはフィークと一緒に少し潮のにおいがする。

俺は荷物を見た。といっても大したもののは持ってきていなかった。海に落ちた時にだめになった爆弾の残骸。ボロボロになった服。剣が無事だっただけましか・・・。セイラが診療所を振り返りながら言う。

「・・・いい人だったね。モリスさん。」

「そうだな。アジトに連絡を取らないと。」

ハリヤ村・・・。俺は場所も分からなかったが地図を見る。フィークに戻るには海を越えなければならない。まあ、幸いフィークは港町だ。船賃さえ手に入られれば、時間は掛かるが戻れるだろう。まずは、ウィッシュテールの皆に無事を伝えないと・・・。多分あの状況で俺達が生きてるとは思わないだろうな。俺はそんなことを考えながら郵便屋に入った。

入ると、受付の若い男がすぐに話しかけてきた。この村で初めて見る。

「ご用件は？」

「電報を頼む。」

「はい。どちらに？」

「フィークまで。」

「あゝお客さん、すいませんね。今フィークの方には電報打てないですよ。」

「・・・？どういうことだ？」

「テロが起こったのご存知でしょう？デットパークとイリユークで。そのテロリストがフィークに潜伏しているらしくてね。今はフィークを中心にあつちのほうには電報、配達、連絡が一切出来ないんだよ。」

「・・・！！」

「不便だよねえ。私も両親があつちにいるから心配だね。」

「・・・。新聞はあるか？」

俺は新聞を買って黙って郵便屋を出た。俺はそれを見て愕然とした。

「・・・冗談じゃないぜ・・・。」

完全にフィークは閉鎖されている。港も今は出入り禁止・・・。それどころかフィーク周辺の町も出入り禁止か・・・。どこからばれたんだ？それにここまで政府がやるとは。最悪だ・・・。

「ワイン、どういうこと？ヒナ達は・・・。」

セイラも状況を読んでか、青ざめた顔で尋ねた。

「今は、正規のルートではフィークには戻れない・・・。」

「どうしよう・・・。」

どうする？と言っても俺達が今出来ることは・・・。俺は地図を見直した。

「ウィツシュテールだけが反政府組織ではない・・・。同盟を組んでいる組織に協力を求めるしかないな。」

「西だ。リグレットの街には同盟組織、カームウォンツがある。」

「そこに行くの？」

「今はそれしかない。行こう。」

俺は地図を握り締めて、そのまま村の出口に向かった。急がなけ

れば……。イエロー、ピック、ヒナ……。みんな無事でいてくれるだろうか？ハリヤ村を後にする。セイラが小さくなっていく村を振り返った。

「……？」

セイラは記憶を失くす前にこんな村にいたのだろうか？ではマテリアルには……。いなかったのだろうか？

「行こう。」

リグレットに行くには、ちょうど手前にあるリフース山を越える必要があった。本当は簡単に行ける道があるのだが、帝国の検問があるのだが……。IDなんて持ってきているわけがないから通れない……。と言っても、俺は4年前に死んだことになっているのでIDは偽造だった。

リフース山……。昔は使われていたらしいが今使うような奴は滅多にいないということだ。セイラは剣を収容所に落としてきたらしく丸腰だ。何かあったら俺が全てカバーしなくてはならない。

覚悟はしてきたが、チルドレンがあまりいなかったのは救いだな……。いないわけではないが獰猛なものは殆どいない。

「ウイン、大丈夫？」

「ああ。俺はいいから足元に気をつけろ。」

リフース山は本当に綺麗な山だった。帝国の本部に近いところは殆ど自然なんてない。その分発達はしているが、どこか息苦しいのだ。湧き水も綺麗で、休憩するには丁度いい。

「少し休むか。」

「うん！」

湧き水を飲んで、大きな岩に腰を降ろす。さすがに疲れるな……。

「セイラ、伏せろ！」

セイラを岩陰に隠れさせた。人影が二人見えたのだ。今はあまり使われない山だと聞いたが……。こんなところで何してるんだ？

隠れて様子を見る。何やら話し声が聞こえてきた。

「・・・それで・・・このあたりは凶悪なのは繁殖していないですね。」

「ああ。小さなのはいくらにいるが、影響は薄い・・・と。こんなもんか。」

「先輩、早く帰りましょうよ・・・。本当に平和な山じゃないですか。何にも出てきませんよ。」

俺は少し身を乗り出した。奴らの手に持っている資料を覗く・・・。チルドレン・・・生息・・・種類・・・？こいつらチルドレンの事を調べているのか・・・？

「ん？おい、ちよつとお前！」

気づかれた・・・。前に出すぎたか・・・。

「つと・・・何だ？」

「何だ貴様は？こんなところで何をしているんだ？」

「ピクニック・・・かな。」

「・・・。ピクニック・・・。一人でか？」

「・・・ああ。」

・・・何か言おうと思って言ったが・・・ちよつと苦しい言い訳だつな・・・。

「検問を逃れて山を越えようとする奴がいるからな。貴様リグレットに行くのか？」

「まさか。ただのピクニックさ。」

「ほう。ではIDを見せてもらおうか。」

「ピクニックに来るのにIDなんて持って来ないだろ？」

「では、名前と市民番号を言ってもらおうか。」

やはり政府のものか。仕方ないな・・・。

「どうした？言えないか？・・・やはり山越えだろう！！」

あまり騒ぎは起こしたくないんだが仕方が無い・・・！俺は剣を抜いた。

「おっと！貴様！やる気か？！」

「悪いが、通してもらおう！」

俺は剣を抜いて奴の足を狙うが、そいつも剣を抜いた。二つがぶつかって金属音が鳴る。その音に、鳥が音を立てて羽ばたいた。こいつは・・・兵ではないみたいだな・・・。力も強くない。奴が持つてるのは、何だか初めて見るような剣だ。幅は結構な幅があるのだからかなり薄く出来ていて、何だか包丁みたいだ。しかしその剣の柄にはしっかりと帝国の紋章が刻まれていた。俺が剣を見切つて一気に剣を降ろそうとした時、

「貴様、待てー!!」

後ろからもう一人の男の声がする。あの二人組の“先輩”の方だ。セイラが見つかった・・・!

「!きゃ・・・!!」

「・・・お前!!手配書の女だな!!」

男が逃げられないようにセイラの髪をしっかりとつかんだ。

「お前、やめろ!!」

俺は振り下ろそうとしていた剣を引いて、“先輩”のほうに向かおうとした。するとやつが後ろから剣を振った。

「よそ見している余裕があるのかな？」

「・・・引っ込んでな!!」

俺は奴の手を狙って剣を振った。

「つてー!!」

奴が持っていた変わった剣が落ちる。その剣を拾い、セイラのほうに投げた。

「!ー!!」

“先輩”が妨害しようとしたが、それをセイラはしっかりと受け取り、そしてそのままセイラは剣を振った。それは“先輩”の手を

傷つけた。その手を押さえながら奴が言う。

「くっ！貴様ら・・・！！」

「先輩、ちよつと・・・無理ですよ！・・・ここは引きましょ
う！帰りましょ！」

「そうだな・・・ちよつと手に負えん！！」

「待て！！」

弱いが、逃げ足は速いな・・・。そいつらは逃げることを決める
と一目散に山を走り降りていった。しかし何故チルドレンを調べて
いたんだ・・・？

「何なんだあいつら・・・？セイラ、大丈夫か？」

「うん。ありがとう。この剣・・・もらってもいいのかな？」

セイラはその変わった剣を握ったまま聞く。

「ああ・・・。まあ、変わってる剣だけど・・・いいんじゃない
か？」

俺達はそのまま山を降りた。どんどん空が暗くなってきた。

「まずいな・・・。夜になると、道が分からなくなる。あいつら
が邪魔しなきゃもうちよつと早く着けていたかもしれないのにな・・・。
それに、夜型のチルドレンが活動し始めるかもしれない。」

その時、セイラが言った。

「ウイン、明りが見えるよ！」

「あれは・・・リグレットだ！！」

山の上からは街の明りが見えた。この辺りで大きな街はリグレッ
トくらいだ・・・間違いないだろう！

「よし！助かった！！降りよう！！」

―そうして、俺達は急いで山を降りていった。幸いそれから変な
奴にもチルドレンにも出くわすことはなく、リグレットに着いた頃
には夜になっていた。

「ここがリグレットだ。」

「ようやく着いたね。すごい大きな町だね。」

「ここらへんはリグレットしか町はないからな。人が集中するんだ。人も多く、商業も盛んだが俺は初めてだな。まあ食物の種類は港町のフイークには負けるがな。」

「ふうん。」

町の奥に進む。もう夜だったから店は殆どしまっている。俺もセイラムももうヘトヘトだ。俺はそのまま宿に入る。町の中でも大きな宿だ。

「ウイン・・・ここに助けてくれる人たちがいるの？」

「ああ。」

ウィツシュテールと同盟を組んでいる反政府組織・・・カームウオンツ。俺はこの町は初めて来るが、言ったことのあるメンバーが言っていた・・・。

宿の受付の女性がにっこりという。

「こんばんは。お二人様ですか？部屋はシングルとダブルがありますが。」

「ウィツシュテールのものです。」

女性は少し困ったような顔をしたが、改めて聞きなおした。

「は？お客様・・・？えーと、お二人様ですか？」

「・・・店長を呼んでもらえますか？」

女性は少し間を置いて言った。

「ーはい。ではこちらへ・・・。」

女性は俺達を奥に通した。その奥の部屋は狭くて四方の木の壁に鏡があるだけだ。3人入ったらもういっぱいになった。そして、女性がその鏡の角を押すと、鏡が回転した。隠し扉だったのだ。その下には地下への深い階段が続いている。

「どーぞ。」

そのまま女性に続いて俺とセイラは長い階段を下に降りていった。そして突き当たりのドアを開けると・・・そこには色んな人達がいる・・・。そして女性が振り向く。

「ようこそ、カームウオントのアジトへ。ウィッシュテールの人だっけ？」

俺はほつと胸を撫で下ろした。

「ありがとうございます。俺は、ウィンといいます。こっちはセイラです。本当に助かりました。」

「よろしくねー。私はプライン。イリユークでは大変だったわね。さつきもウィッシュテールの人が来たのよ。知り合いなんじゃないの？」

「えっ？」

「あそこ。ほら。」

そこには見覚えのある顔があった。

「・・・イエロー!!!」

episode 13 歩き続けて (後書き)

最後までご覧いただきありがとうございました！

ご意見・ご感想いただけましたら幸いです！

ブログもご覧いただけますのでぜひご覧ください！

[http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/](http://motherproject.blog.shi
nobi.jp/)

応援よろしくお願い致します！がんばります！

黄色い少し肩にかかるくらいの髪。見慣れた横顔。その男は荷物を片手にメンバーと何やら話していた……。近寄ると、それはやはりイエローだった。

「イエロー?!」

「!! ウイン! セイラも! 無事だったのか!」

プラインがニツと笑った。

「やっぱりイエローの知り合い? ウィッシュテールって言うてたからさ。」

「おお、ありがとうな。プライン。」

イエローの知り合いだったのか。

「あなた達も会えて良かったわね。じゃあ何かあったら言うて。」

「ありがとう。」

俺はプラインにお礼を言った。

「ふふ、ども。じゃあね。」

プラインはそう笑って、奥のほうに歩いて行った。

「イエロー・・・良かった。もうだめかと・・・」

そんな場合でもないが、俺は少し気が抜けた気がした。

「俺のほうこそだ。俺以外全員だめかと思ってたぜ。お前ら、どうやって助かったんだ?」

「俺達は、帝国の飛行機に乗って・・・途中で海に落ちてしまったが。人に拾われたんだ。」

「運が良かったな。海に落ちたのも。地上なら命が無かったぜ。セイラも、な。」

「イエローは? 探してたんだ。」

「俺は、帝国兵に塔の上で囲まれちまってな。」

「って・・・大丈夫だったのか? 大丈夫そうだけど。」

「まあな。捕まっただけで、鍵を壊したところの囚人が助けてくれたんだ。」

「囚人が・・・？イエローも運が良かったな。」

「お互い様だ。それで、その時助けてくれたのが・・・おい、ジョイン。」

さつきイエローと話していたメンバーだ。40歳くらい・・・だろうか。髭を生やしっぱなしで、服もボロボロ。何だかその辺にこそうなおっさんだよな・・・。

「この、ジョインがそうだ。もともとジョインは捕まる前は、このメンバーだったんだ。俺の顔を知っていたらしく助けてくれたんだ。ジョイン、これがうちのウィッシュテールのメンバーのウィンとセイラだ。」

「よろしくな。ありがとよ。助かったぜ。」

ジョインは手を伸ばす。俺も合わせて手を出した。セイラも習って手を出す。ジョインが俺を見て言った。

「あれ？あんた、その目レッドアイか？」

「・・・まあな。」

「こっちの姉ちゃんは今金目か。変わってるなあ、あんたら」。複雑な気持ちで握手した手に、ジョインからのギュッと力がこめられた。セイラはどうしていいかわからないみたいだったが、ジョインが勝手に手を握っていた。握手が初めてなのか？そう言えば、アジトではしなかったっけな・・・。

「握手だよ」

「・・・あくしゅ？」

セイラが俺の顔を見た。

「ああ、よろしくってことだな。」

「・・・。」

握手した手をセイラが不思議そうに、じっと見直していた。

そこで、イエローが話を戻す。

「俺はジョインのおかげで、カームウォンツのメンバーに連絡を取ってIDを手に入れられたが・・・お前らはわざわざリフース山を登ってきたんだろ？お疲れ様だったな。」

「そういえば、途中で変な奴がいて・・・。一応帝国の奴らみたいだったけど・・・。」

そういえば、あいつらチルドレンを調べていた・・・。フリークで会ったデイトて奴の腕についていたチルドレン・・・。帝国は・・・。マテリアルはチルドレンを兵器として使うつもりなのだろうか・・・？それとももう前線では使われているのだろうか？

「帝国兵い？！何で山にいたんだ？とにかく災難だったな。大丈夫だったか？」

チルドレンの事は・・・言わないでおこう。まだそうだと決まっていたわけではないな・・・。

「兵ではないみたいだったから大丈夫だ。ところでイエロー、フリークの話は聞いている・・・よな？」

「そう、今話そうとしてたんだ。知ってるなら話が早いな。」

「ああ。新聞で見えて知った。ちよつと、やばいな・・・。」

「かなり本格的に調べているようだ。」

「早くフリークに行ってみんなを助けないと。」

「ったく・・・完全封鎖だもんな。・・・ここまでやるか？帝国のクソ野郎が！！」

イエローがちつと舌打ちする。

「よお！戻ったぜ！」

その時入り口からスキンヘッドの男が降りてきた。30半ばくらいだろうか？随分背が高く、ゴツイ体をしている。真っ赤なタンクトップなんか着てるから何だかチンピラみたいだな。こいつもメンバーか・・・？

「ブレイブ!!」

イエローがその男に話しかけた。またイエローの知り合いか。さすがリーダー、顔が広いな・・・。

「よおイエロー、久しぶりだなあ～～!!お前が着てるって聞いてよ。急いで戻ったぜ。」

「ああ。悪いな。今回の件は・・・済まなかった。」

「・・・大変だったろう。」

そう言ってイエローの肩をポン、と叩く。もう事情が伝わっているらしい。

「ウイン、セイラ。カームウオンツのリーダーのブレイブだ。」

「お世話になってます。ウインです。」

セイラも黙って頭を下げた。

「おお、よろしく。いや、こんな場所には似合わない綺麗なオネーチャンだな。おっと、プラインに聞こえちまうかな?」

「・・・。。。」

「・・・あれ?ちょっと緊張しちゃったか?はっはっは。」

セイラが真顔でブレイブを見つめている。笑ってやれよ・・・。

ブレイブも少し気まずそうじゃないか・・・。イエローが話を切り替えたから良かった。

「ブレイブ。フィークに帝国が入っている。アジトの仲間を助きたいんだ。迷惑を掛ける・・・。」

「困った時はお互い様だつてな。」

「・・・すまないな。」

「誰もお前を責めんさ。・・・そう言えば、あいつは一緒じゃないのか?何ていったか・・・?ほら、あの元気な。オレンジの髪の毛ツンツン頭。」

「・・・オレンジって・・・。ピックか?」

「そうそう。あいつ。ピックだよ。」

「ピックは・・・。ウイン、ピックとシースとはどうなったんだ?」

「……」

俺は黙って首を振った。イエローはブレイブに言う。

「そうか……。あいつらとはフィリークではぐれたままなんだ・
・。」

「無事だといいな。」

「ああ……」

「まあ、俺達のできることなら何でもしてやるつもりだが……
とにかく、早くどうするか手順を決めるんだな。こつとへ。」

ブレイブは俺達をアジトの奥に案内した。ウィッシュテールよりもメンバーも多けりやさすがに広いな。宿屋の地下深くを掘って使
ってるのか……。ちゃんとした立派な木製の建物だ。俺達のアジ
トは壁も床も土か石だし、ここみたいにきちんとした建物ではない
が……。何となく、雰囲気似ていた。キッチンや食堂、いくつか
分けられた部屋……。ブレイブはその小部屋の一つのドアを開け
た。小さな部屋だがベッドが四つ、テーブルと椅子が置いてあった。
「この部屋を使おう。少し狭いが。」

「十分だ。サンキュな。」

それぞれ椅子に腰を掛ける。ようやく落ち着いて座ることが出来
た……。もうセイラもぐったりしている。そりゃそうだよな。ハ
リヤ村から休んだといえば山の中で湧き水を飲んだ時くらいか。足
がじんじんする。

「そういえばウィン、お前ここの場所やパスワード、良く分かっ
たな。」

「ああ……。前、ヒナが言っていたんだ。合言葉“店長を出せ”
だろ？笑ったよ。」

「ブレイブが考えたんだよな。」

「おう。いちおう店長は俺だからな。」

ブレイブが笑う。

「しかし・・・イエロー、ここは何となくウィッシュテールに似てるな。」

「俺も元カームウオンツにいたからな・・・。ブレイブには本当に世話になった。」

「お前が新しく組織を作るってときは驚いたけどな。」

「・・・お世話になりましたってば。まあ、そういうこと。カームウオンツを手本にウィッシュテールを作ったんだ。作りは一緒だろ?」

なるほど。確かに似てると思った。フィークのアジトの雛形だつてわけか。それにイエローがここに知り合いが多いわけだな・・・。

「さて、早速本題に入るか。」

「といっても、実際の情報が入ってこないからな。とにかくフィークに行つて状況を見るしかないだろ。」

「ああ。港は今封鎖されてるんだぞ?どうすれば・・・。」

俺は地図を開く。ここは内陸だが・・・。

「ここからは近くに川があつただろ?あそこから出て海を越えなければならぬ。小さめの舟を手配できればな・・・。」

「ブレイブ・・・出来るか?」

イエローがブレイブに言う。ブレイブが顔をしかめ、顔を上に向けた。

「んーと、舟ねえ・・・。出来ないことはないが、メンバーはどれくらいいるんだ?」

「そこまで多くない。俺達を合わせて全員で12人だ。」

「12人か。了解。」

ブレイブがメモを取る。

「それで向こうに渡れたとしても、どうやって町に入るんだ?」

「正面から奇襲・・・出来ればしたくないな。」

「地下水路からあいつらもう脱出してたりしてな」

確かに下水道からなら、直接外に出れるらしいが……。

「チルドレンが住み着いていた。あの状況では残りのメンバーだけじゃ危険だ。」

「でも、そこしかないな。やっぱり。」

「……ああ。それでいこう。」

ブレイブがメモを止める。

「それでまとまったのか？あんまり書くこともねえなあ。」

「……簡単な計画だが。下水道から責める。それがためなら正面からいくしかない。」

「よし、じゃあ、とりあえずは決まりだな……。後は状況を見て……。って感じが。大人数で行くわけに行かないが、俺とうちのメンバーも何人か連れて行く。舟の準備に少し時間をもらうぜ。」

「ありがとうございます。」

「悪いな。ブレイブ。」

ブレイブが立ち上がる。椅子から座って見上げるとかなり大きく見える。

「ああ。任せとけ！お前らは飯を食って風呂に入れ！そして寝ろ！」

「……そういうわけにも行かないだろう。」

「いや、俺も手伝います。何かすることはありますか？」

「山越えてきて疲れてるんだろ？いいから休んでおけ。」

「いや、でもそういうわけには。」

「年上の言うことは聞いておきな。兄ちゃん。」

何か申し訳ないが……。甘えておくか。正直ありがたい。もう疲れて……。くたくだ……。

「……すいません。ではお言葉に甘えて……。」

ブレイブがにつこりと笑い、部屋のドアから大きな声を上げた。

「よし。おい、プライン！飯余ってるだろ！イエロー達に出し

てやってくれ！」

「は～～い！！ちょっと待ってよね～～！！」

「じゃあ、ちょっと待ってな。」

そう言つてブレイブは部屋から出て行つた。

こんなでかい声出して平気なのか・・・？宿屋だろう？泊まつている客もいるんじゃないのか？

「おい、イエロー・・・声大丈夫なのか？」

俺はイエローにこつそり尋ねてみた。すると、イエローは自身ありげに

「入り口の階段、かなり長かつただろ？ここは予想以上に深く掘つてあるんだ。防音効果はかなりのもんだ。」

俺は天井を見上げて、へえ、と感心した。

部屋のドアが開くとプラインが食事を運んできてくれた。

「はい。お待たせー。余りもので悪いけど、いっぱい食べてよねー。あと、お風呂も沸いてるから。場所はイエローに聞いてね。」

プラインは少し気の抜けた話し方で、おしゃべりしながら料理を並べた。すると、テーブルがあつという間に食べ物でいっぱいになった。パンに肉にスープに果物……。余りものつて・・・ブレイブの気遣いか。

「ありがたく頂戴しようぜ。プライン、サンキュ。」

「いただきます。」

セイラも真似て言つた。

「・・・いただきます。」

俺達は腹ペコだったので、その食事をすごい勢いで、あつというまに平らげた。味も量も十分だった。その後、それぞれ風呂に入つてそのままベッドに入つた。

「明り、消すぞ。」

「ああ。」

俺は酷く疲れていたけどしばらく寝付けなかった。

奇妙なチルドレン……。チルドレンの触手を素手で引きちぎった……。俺の体。あんな力がどこから出たんだ？それにあんな激しい発作も初めてだ……。モリス医師に言われたボツシュのこと……。セイラの記憶の事。そして、フィークのこれだけ大規模な閉鎖……。

何かが少しずつ変わり始めてるんじゃないだろうか……。そう、セイラと出会ってから……。急に目まぐるしく……。

ふつと目を開ける。時計を見るともう朝だ。あのままいつの間にか、眠っていたらしい……。地下は光が入らないせいか寝起きが悪い。だるい体を起こして、首を回すと、ゴキゴキと鳴る。隣をふと見ると、イエローがもう目を覚ましていた。

「イエロー……。起きてたのか。」

「ああ……。」

「まさか、寝てないのか？」

「寝付けなくて。起きようぜ。」

そう言つとイエローはベッドから降り、部屋を出て行った。イエローが……。一番不安なんだ。俺もベッドを降りる。ふとセイラを見るとまだすやすや眠っていた。もう起こすか……。

「セイラ、起きろ。」

「ん……。」「

こうして俺達は着替えて、食事を取っていた。すると、ブレイブのでかい声が響いた。

「おい！舟の準備が出来たぞ！町の外に来い！！」

いそいで食事を胃にかっ込む。

「いくぞ！！」

長い階段を登り、町を出る。近くを流れる川岸には小さな舟が2つ繋いであった。ブレイブが自信満々に言う。

「どうだ！どうみても釣り人の舟にしか見えないだろ！」

「そうだな。これなら沖に止めてあっても、見過ごされそうだな。」

「まあ、本当に釣り用の舟だからな。改造してあるから実は結構早いんだぜ。」

本当に釣り用の船かよ……。どこから持ってきたんだか。

ん？船にもう誰か乗っている……。色黒でパーマの掛かったブラウンの髪。少し濃い目の化粧と露出の多い服……。それはブラインだった。

「どーも。よろしくねー。」

おいおい、大丈夫かよ……。という顔をしていたら、イエローが後ろから肩をたたいた。

「心配するなよ、ブラインはやり手だぜ。」

ブラインが不満そうに口を尖らせて言った。

「なによー？あたしじゃ不安だったのー？」

「い、いや。ありがとう。助かるよ。」

イエローがそう言うのなら、な。もうひとつの船にはジョインが乗っていた。

「助けてもらったからな。俺も手伝うぜ。」

ブレイブが声を張り上げる。

「さあ乗った乗った！フィークまで飛ばすぜ！！！」

俺達が舟に乗り込むと、ブレイブはすぐに舟を動かす。改造してるのは本当らしい。見た目の割りにかなりのスピードで、舟は川を下っていった。

episode 15 追放

リグレットを出て、船は川を下っていった。俺とセイラがジョインの操る舟に乗り、イエローとブラインがブレイブの操る船に乗る。しかしこの釣り舟、本当に見た名以上の速さで走ってくれている。かなり改造してあるんじゃないのか？俺は船を見ているとブレイブが、

「ははん、驚きだろ。ただの釣り舟じゃねえんだな。俺の釣り用の舟なんだよ。ちよつと昨日夜に強化しておいたんだ。燃料もバツチリ。すげえだろ。」

と、得意そうに言った。自前だったのか……。てっきりどこから借りてきたんだと思っていた……。しかし……。俺の様子を見てブレイブが言う。

「あ？ウイン、お前顔色悪いぞ。」

……。こんなに揺れるものとはな。兵士時代に船に乗ったことはあるが大丈夫だったのに。

「お前もしかして船酔いしてんのか？」

イエローがニヤニヤしながら言った。

「ウインが船酔いねえ。ふーん。ほらセイラ、看病してやれよ。」

「いい……。から……。」

セイラが言われるまま、背中をさすってきた。

「大丈夫？ウイン？」

「うぶ……。さすらないでくれ……。」

「悪いセイラ……。放つといてくれないか……？」

「そつか。」

ってかみんな平気なのかよ……？

船に揺られている時間がかかなり長く感じた。何とか戻さずには済んだが……。

「あれ、フイークじゃない？」

しばらくしてから、望遠鏡を覗きながらプラインが言った。ううー気持ち悪い・・・何とか覗いた望遠鏡の先にあったのは・・・フイークだ！戻ってきたんだ！！だが、入り口の門は硬く閉ざされている。門もかなりの警備の数だな。

「ウイン、どうだ？」

ジョインが俺に尋ねる。

「・・・やはり表からはきつそうだな・・・。イエロー。」

「分かった。下水道から行こう。」

イエローは町から少し離れたところに舟を進めるように頼んだ。

町近くの海沿いの崖・・・、横穴から下水が流れ出している。

「あの横穴からアジトに繋がっている・・・大丈夫か？ウイン・・・。」

「・・・了解。問題ない。」

ようやく舟から降りれるのか・・・俺はとにかく船から離れたくて真っ先に崖を登った。

「町の外から入れる唯一のルートなんだ。」

下水の中を奥に進んでいく。明りも無く暗いが・・・奥の暗闇から生き物の気配がした。プラインがランプに火をつける・・・すると・・・それが姿を現した。暗闇でもぞもぞと動き回る。

「チルドレンだ！！気をつける！！」

チルドレンが騒ぎ出した。キイキイと泣き声をあげる・・・。そして俺達に飛び掛ってきた！！

「来たぞ！！」

俺は剣を握る。みんなしっかりと武器を手にして、チルドレンに応戦した。心配していたプラインは短い刀を両手に二本しっかりと持っており、どうやら心配ご無用だったようだ。背中を合わせて、司法からの攻撃を防いで確実に片付けていくが・・・。

「ち、多いな・・・埒があかねえ。」

イエローが舌打ちした。次から次へとチルドレンが飛び出してくる。どうやらこの入り口周辺のあたりが一番数が多いようだ。ブレイブが俺達を見て言った。

「お前ら、こいつらを飛び越えろ！！ジョイン、お前もだ！」

俺とイエロー、セイラ、ジョインは言われたとおりチルドレンの群れを飛び越えた。

「先に行け！！時間が無いんだろ？！」

「ブレイブ！！」

「チルドレンの掃除は任せておけ！！」

「そーよ。大丈夫。私もいるしね。」

プラインがブレイブをサポートするようだ。イエローは少し間を置いて、

「・・・悪い！！ここは任せた！！」

と声を上げて走り出した。

「ウイン、セイラ、ジョイン、俺についてきてくれ！」

イエローが先導し、アジトまでのルートを辿る。水路とその脇には、整備のために人が通る通路。通路がない所もあり、その時は下水の中を歩かなきゃならない。薄暗い石レンガの壁が続いていた。下水道って意外と広いんだな・・・。

「しかし、いざって時のためにアジトにつなげておいたんだが、本当に使うときが来るとはな。ちよつと待て。」

イエローが地上に続いているのであるう梯子を見つけ、登る。

「・・・ちつ。見てみるよ。」

俺も続いて登る。天井についている鉄の蓋。マンホールか・・・。少し押し上げて覗いてみる。兵士がぞろぞろいる。抵抗した人々だろつか？広場に縛られてまとめられている。

『いいか！！逆らったり隠したりすると貴様らもこうなるぞ！！』
兵士が人々に叫んでいる。おれは静かに蓋を閉めて梯子を降りた。

「ひどいな・・・。」

「ああ、急ごう!」

俺達はチルドレンを片付けながら、奥に進んだ。そして、角に差し掛かった時、イエローが立ち止まる。しかし臭うな・・・。

「おい、なにもないぜ。」

ジョインがイエローに言う。確かにここには梯子もないが・・・。確か、ここは俺達は武器や防具を隠した場所・・・。

「こつちからは見えないようになってるんだ。もし誰か来たらまずいからな。」

そう言っただ水道の天井を指差した。俺は光を当ててよくみると天井に扉がついている・・・。同系色で、こんな暗いところじゃ良く見ないと分からないような・・・。

「あれか?!」

イエローは剣の柄を扉のくぼみに引っ掛けて開けた。続けて同じように梯子を引っ張り降ろす。

「ああ。行こう!!」

イエローに続いて梯子を上ると、あのトイレの床だ。続いてセイラが出てきた。急いでトイレのドアを開けると・・・。メンバーの何人かがそこにはいた!

「みんな・・・!!間に合ったか!!」

「イエロー!!ウイン・・・!」

俺の目にシースが飛び込んできた。生きていたのか・・・!!俺は思わず駆け寄った。

「シース!!無事だったのか!良かった・・・!!」

「ウイン・・・!!あの状況で助かるとは・・・。」

「偶然助かったんだ。運が良かった。ピックは?」

「ピックは・・・。出口ではぐれちゃって・・・結局俺一人で帰ってきたんだ。」

「そうだったのか・・・。」

ーピック……。そのときシースがセイラを見て、顔をこわばらせた。

「……………あ……………」

「ああ、セイラも無事だったんだ。……どうしたんだ？シース？」

「…あ…いや…違うんだ…町の本当の閉鎖の理由って…」

言いにくそうにシースの声が縮む。何だ？

「？……………何だよ？」

「あいつら…セイラを探してるんだよ…。イリユークでセイラがいたのがバレたみたいで……………」

シースが顔を背けながら言った。俺はシースの方を持って聞いた。
「……………なんだと？」

女一人の搜索でここまで……………？何のために……………？！おかしい！とにかくフイークから出よう……………！

「とにかく早く逃げるぞ！！ほかのメンバーは？！」

「みんな食堂にいるはず……………」

「きゃあああ……………！！！」

その時、上から叫び声が響いた。

「?! ……なんだ！？今の……………！」

「店からだ！！おい、店番誰だ？！」

「……………ひ……………ヒナだ！」

「！！…ちきしょう！」

イエローが店に走る。セイラがそれを追ひ、俺もそれを追った。扉の向こうからヒナの声がする。

「やめてください！！ここには何もありません！！」

隠し扉の外側……………足音で分かる……………かなりの人数がいる！

「どけ！！女！！」

「やめて！！！」

そして、扉が勢い良く開いた！！

「隠し扉だ！！奥にいるぞ！！」

「ここだ！！ここがテロリストどものアジトだ！！」

—— やばい・・・ばれた！！

奴らが踏み込んでアジトに入り込んで来たのだ。かなりの人数だ。

「きゃああああ！！！！」

「わあああ！！！」

メンバーがざわめく。

「くそおつ！！ちよつと遅かったか・・・！！」

俺達は剣を構えた。

「逃げ場はないぞ！！テロリストども・・・覚悟しろ！！」

その時ヒナがそう言った男の前に飛び出した。イエローが驚いて叫ぶ。

「ば・・・！！ヒナ、やめろー！！逃げろー！！！！」

男の首にナイフを突きつける。

「動かないで！！みんな、早く逃げて！！早く！！」

「邪魔だ！！」

兵士の声がすると同時に、血が舞った。それは、ヒナのものだった。その体は、セイラの目の前にどさつと倒れた。――顔にヒナの血を受けたセイラが目を見開く。

「・・・ヒナあ！！！！！！」

イエローの悲痛な叫びが響いた。

「捕まえる！！抵抗する奴は殺すんだ！！」

兵士が一気にアジト内に流れ込む。相当な数が踏み込んできた。

メンバーが慌てふためいて逃げ回る。このままじゃ、やられる！！

！おれは騒ぐメンバーに向かって叫んだ。

「みんな武器を取れー！！殺られるぞー！！！！」

「！！ この女だ！」

「捕まえる！！」

セイラを見つけた兵士がセイラの手を取った。

「……?! セイラの様子がおかしい。ヒナを見て、見開いて、ガタガタ震えている。」

「ああ……あ……。あ……」

「おい、逃げろセイラ！！！」

兵士がセイラを床に押さえつける。セイラは抵抗する様子も無く、されるがままだ。

「くそお！！！」

俺は助けに行こうとしたが、次々襲い掛かる兵士から、安心して
いるイエローをかばいながら剣を受けるのでせいっぱいだっ
た。

「イエローしつかりしろ！！」

だめだ……。聞こえていない……。!!!!

「きああああああああああああああああああ！！！」

!!!!!!!!!!

その時、セイラがどこから出したのか分からないような金切り声
を上げた。

「セイラ……。?!」

その瞬間。セイラを押さえつけていた二人の兵士が宙にとんだ。

そして宙に浮いたまま、その兵士から血が噴き出した。俺の顔に血
しぶきが掛かる。イエローとヒナも紅く染まった。

何だ？今、何があった？そして次の瞬間、何かが俺の前をかす
た。セイラだった。セイラはそのまま兵士の中に飛び込んでいつ
た。そして俺が戦っていた兵士は、その一瞬で首がなくなっていた。

「なっ……。?!」

セイラは止まらない。まるでそこには何も無いように走り、兵士を一太刀で切り刻んでいく。ぼとぼと人間の体の一部が、人間だったものが血と一緒に床に落ちていく。——こんな風景を見たことがある。随分昔——戦場にいた時だ。人が、どんどん死んでいく。でもそれは戦とも違う殺戮だった。舞う血しぶきで、イエローの顔が、ヒナの亡骸が紅くなった。

「セイラ——！」

セイラの目がギラギラしている。金の目の中にある瞳孔が完全に開ききっている。残った兵がその勢いに押され、退いた。

「全員撤退だ——！こいつは……やばい——！全員殺されるぞ——！」

「撤退、撤退————！」

後退し、逃げる兵を、逃がさないとしても言うようにセイラが迫った。兵士の一人の襟を後ろから掴む。

「ひ、ひいいいっ」

「やめるセイラー——！」

俺はセイラに剣を向けた。セイラの剣と俺の剣がぶつかる。勢いづいたセイラの剣を受け止めると、それは思い切り弾き合い、火花が散った。

「セイラ、剣を引け——！もういいんだ——！」

「ああああああああああ——！！！」

止まらない。興奮しきっている。本気でやらないと……こっちがやられる——！俺は力を込めて剣を振った。左目が熱くなるのを感じる——力では俺のほうがさすがに強く、セイラは後ろに飛ばされた。しかし、すぐさま身軽に体勢を建て直し、兵に向かおうとする。俺はその剣をまた受ける……そのまま押し返してセイラを壁に後ろに押しやった。

「落ち着くんだ——！！こいつらを殺したって……ヒナは、ヒナは戻らないんだ——！！」

それを聞いて、セイラはようやく止まった。一瞬悲しそうな顔を
して。

その体は返り血で髪も、顔も、腕も、べったりだった。セイラは
剣を握りしめたまま、そのままよろけて、力を抜いた。セイラの手
から剣がすり抜けて、音を出して地面に転がった。そして顔は動か
さずにその目だけで、血だらけの、死体だらけのその周りを見廻し
た。そして、自分の血だらけの両手の平を見つめて、震えだした。

「・・・や・・・ああ・・・あ・・・。」

そして力を失ったかのように、がくと膝をついた。ようやく落
ち着いたか・・・。俺は剣を降ろした。イエローはヒナを抱えたま
ま動こうとしない・・・。いつもの気丈で明るいイエローはそこ
にはいなかった。イエローの影から見える閉じられたヒナの瞳は、も
う開くことが無かった。ヒナ・・・。

次の瞬間、突き刺さるような視線を感じて周りを見廻した。ウイ
ツシユテールのメンバーの皆が、こちらを見ていた。さっきのセイ
ラの戦いを見て・・・固まっていた。そのまま、動かない。みんな
脅えて蔑むような瞳をしていた。俺はみんなの方に近寄って言った。

「みんな・・・。」

「きゃっ！！！！」

メンバーの一人のサラが、体をビクツとさせて、俺から離れた。

？何だ・・・？

「・・・サラ・・・？」

「・・・あ・・・あ・・・。」

涙目だ。怯えている・・・？その時、奥からセイラに「人殺しい
！！」という叫びと共に、何かが投げつけられた。それはセイラの
頭にあたった。そしてそれが俺の足元に転がってきた・・・石だ。

「?! おい！リダ！何を・・・」

石を投げたのは、メンバーの一人のリダだった。セイラが頭から

流れた血を手で押さえる。そしてリダをじっと見てゆっくりと近寄った。

「ひっ……!!」

リダが恐怖に顔を歪めた。

「く、来るなあ!!」

すると他に奴も言い、セイラに石を投げた。皆、それに習って石を投げつける。セイラの体に石が当てられる。石を避けようとせず、ただ皆を見ていた。それがまた皆を怯えさせた。

「やめてくれ!!みんな!!ダイも止めてくれ……!」

俺は手前にいたダイに向かって言った。ダイは顔を逸らして言う。

「ヒナが死んだのも……帝国兵はテロリストよりも、むしろこの女を捜してたんだぞ……?お前があんな……女連れてきたから!お前の責任じゃないか……。それにお前も……!」

ダイが言葉に少し詰まった後、シースが言った。

「ウイン、お前だって、仲間じゃないか!あれだけの兵が止められなかったあの女を止めるなんて……普通じゃない!!俺達の事殺すのも簡単だろうよ!」

——え……?

「俺は初めてからお前ら二人は怪しいと思っていたんだ……」

ジョインが俺を見て言った。するとみんな口々に言う。

「私も……」

「それにあの赤い目……レッドアイだろ?あいつこそ帝国のスパイじゃないのか?!」

「あんな女連れてきたから……お前の責任だろ……?それにお前だって……」

「それに、あの女、あの兵士たちみたいに私達を・・・殺すつもりなんじゃないの?！」

「みんな、殺されるぞ!!!!」

「化け物!!」

化け物・・・

「ま、待つてく・・・っ!!!!!!」

みんなが俺に、セイラに石を投げつけてきた。石が頭に当たる。痛み of 走る頭を抑えた。みんな、熱くなっている。俺達に向けられた、いくつもの恐怖と憎しみの目。やめてくれ・・・その目を・・・。

「セイラ・・・。」

セイラは石を避けようともせず、膝を突いてうな垂れていた。セイラ・・・。何でこんなことになってるんだろ? 何のためにここに・・・来たのだろう?

「おまえら!! 何してる!!」

メンバーの後ろ。地下水路の方から太い声がする。ブレイブがアジトに着いたのだ。そしてその殺戮の跡を見て絶句した。今まで騒いでいたメンバーは押し黙った。

「ウイン・・・セイラ・・・これは・・・。何だ!! イエロー!! おい!!」

安心して座り込んでいるイエローにブレイブは近寄り、ヒナの亡骸を見て動きを止めた。

「・・・ヒナ・・・。そうか・・・。」

「・・・。」

イエローは返事をしない。するとブレイブが何も言わずイエローの顔を思いきりグーで殴った。イエローはヒナごと吹っ飛んで壁に叩きつけられた。

「いいか?! お前はここのリーダーなんだ!! 反政府組織にいる

ってことは、こういうことがいつ起こってもおかしくないって事が分かってたんだろうが！！遊びじゃないんだ！！お前が今守るべきは・・・今生きているメンバーだろうが！！」

イエローは頭を振って、ようやくと動いた。

「ブレイブ・・・すまない・・・。俺は・・・。」

「謝ってる暇があつたら起きろ！！」

続いてブレイブはメンバーを、俺達を見て怒鳴った。

「お前らもいったい何をしているんだ！！今すべきことが分からないのか？！！」

「ブレイブさん、でもこいつら・・・！！俺達の事殺そうと・・・！！」

「?! 何・・・?!」

イエローがブレイブの肩を抑える。

「それは違う・・・。俺が一部始終を知ってる・・・。みんな！争うよりも今はとりあえず脱出だ！！表に船が止めてある！下水道を走れ！！」

「あ・・・ああ！！」

メンバーはブレイブの後について下水道を進んでいった。残された俺は、庇っていた血にまみれたセイラの顔を見る。その目は、どこも見てはいなかった。

「ウイン・・・」

ヒナを抱きかかえたイエローが近寄ってきた。

「悪かった・・・。俺は・・・何も出来ずに・・・。とにかく外に出よう。」

「・・・イエローを責めるつもりは無いし、誰が悪いと言つつもりも無い。」

ただ、“化け物”という言葉だけが俺の心に残っていた。

「セイラ、歩けるか。」

返事はなかった。歩こうとしないセイラを引きずって、俺は下水

道への梯子を降りた。ブレイブたちがチルドレンを戦ったした後が続いている。兵士がまた責めてくるのは時間の問題だな……。足を急がすが、イエローもヒナを背負っていて、俺もセイラを引きずっているものだから時間が掛かる。

そして外の光が見えてきた。下に待機している舟にはすでに乗り込んでいるメンバーの姿が見えた。俺達の姿を見つけて、プラインが呼びかける。

「ちょっと、遅いわよー！もう出すから早く乗ってー！！」

俺達の血だらけの姿と、ヒナの亡骸を見てプラインが動きを止めた。そしてセイラの様子に驚いた。

「……とにかく乗って。」

メンバーは俺とセイラが船に乗ろうとすると距離を置いて離れた。リダが俺達を睨み付けている。カームウォンツに戻る途中の船の上では誰も何も話さなかった。ブレイブも、プラインも気を使ってか話さなかった。イエローはヒナの血を拭いていたし、俺も黙って川の水でセイラの体についた返り血と、自分についた血を拭いていた。

リグレットの川岸に着いた。ひとりひとり岸に降りていく。ブレイブが皆に言う。

「よし、みんな疲れてるだろ。カームウォンツのアジトに案内するから着いて来い。」

その途端、ジョインが言った。俺達を見て。

「リーダー……この二人も……アジトに入れるんですか？ここまで面倒見てやったんだ……もう」

「……とにかく一度落ち着こつ。お前らも、来い。」

ブレイブは俺達を見て手招きした。

カームウォンツのアジトに着き、イエローがヒナの亡骸を布の上

にそつと置いた。みんなそれを囲むように座った。

「ヒナ……。」

「俺、すごく世話になったんだ。」

「私も、ヒナがいなかったら……。」

皆口々にヒナの事を思い返している。

そのとき、リダが泣きながらセイラを突き飛ばした。セイラは後ろに倒れる。

「出て行つてよ!! ウィッシュテールから、私達の前からさあ!

!」

みんな少しびっくりしてリダを見た。普段がおとなしいから……。

「ヒナを、ヒナを返してよお!! あんたのせいでヒナは……!

!」

「やめろ! セイラのせいじゃないだろ!!」

イエローがリダの手を掴んで止めた。

「でも、イエロー。もともとフィークの閉鎖はセイラを探すためだった……。」

「そのせいでヒナは……。」

「やめろよ!! そんな事言うなよ!! どうしちゃったんだよ!!」

イエローが必死に止めようとしてくれているが、みんなの勢いは止められない。

「イエロー、お前……ヒナが死んだのはセイラのせいだぞ?!」

「それにあの殺戮……あんなのと一緒になんて恐ろしくていられるかよ!!」

「リーダーがスパイの味方かよ!!」

「リーダー、何とかしてくれよ……!」

「俺達は、殺されるために組織に入ったわけじゃない!」

―もう、いい。こんな中には・・・これ以上居たくない・・・。
そんな目をそれ以上見たくない・・・!!

「いい。イエロー。もういいんだ。」

「ウイン、でも・・・!」

俺はみんなに向かつて深く頭を下げた。

「みんな、迷惑を掛けて悪かった。俺とセイラは・・・ウィツシ
ユテールを出す。だから、それでもう勘弁してくれ……。もちろ
ん秘密は守るから・・・。」

すこし押し黙った空気。その後メンバーが言う。

「―ああ、そうしてくれ!!」

「当然だ!!」

皆が騒がしく俺達を詰る。皆に背を向けた時、リダが俺達に叫ん
だ。

「あんた達・・・出て行ったからってあんた達の罪が消えるわけ
じゃないんだから!」

―リダ・・・もうやめてくれ・・・

「絶対に許さないからあ!!」

その時、プラインがリダの頬を叩いた。

「何すんのよ!!」

「もうやめな。みつともない。あんたたちもだよ。」

プラインの迫力に皆、おとなしくなってその後は何も言わなかつ
た。

俺は手荷物と剣を持つと、セイラの手を引いた。この細い華奢な
手が、あれだけの兵士達を薙ぎ倒すとはな・・・。

「行こう。」

セイラはあれから何も話さない。当然か。話したくないよな・・・。
俺だってもう・・・。長い階段を登り、宿屋を出た。リグレット・
・・・もう来ることはないだろう。

その時イエローが追ってきて、頭を下げた。

「ウイン・・・セイラ・・・すまなかった。みんな誰かを責めないではいられないんだ。」

「わかるさ。みんな怖いんだ。俺達が。」

「人は・・・自分と違うものを恐れる。でも・・・」

「・・・普通に考えたら俺達は化け物・・・か。」

「それでも俺は・・・お前に、セイラに助けられたよ。あの時だつてセイラが兵を倒してくれなかったら俺達はやられていたんだ。」
ふとヒナの顔がよぎる。

「あ・・・。イエロー、ヒナのことは・・・」

「・・・あれがヒナの選んだ道だ。それに、ヒナを守れなかったのは・・・俺だ。」

「・・・。」

「お前らはどうするんだ？」

「俺達には・・・目的がある。そのために・・・行くよ。」

「そうか・・・」

「ああ。」

「もし、ピックが見つければ・・・皆を説得できるかもしれない。あいつメンバーみんなと関わり深いから・・・。旅の途中で、良かったら・・・探してくれないか？ピックを。」

そういえばピック・・・どこに行ってしまったんだ？お前がここにいたなら、何て言っていたのだろう？化け物だと言っていたのだろうか？俺達に石を投げただろうか？それとも・・・。

「ああ。分かった。」

俺はあまりうまく笑えなかったけど、少しだけ笑った。

「気をつけて行ってくれ。俺は、お前らを・・・応援してるからよ。もしこっちに来ることがあったら連絡してくれ。」

「・・・ありがとな。」

イエローは、俺の事情を全て分かっていて俺を組織に入れてくれた。

「こっちこそ・・・。セイラもな。記憶戻るといいな。」

しかしセイラは顔をあげようとしないままだった。イエローは俺達が見えなくなるまで見送ってくれていた

こうして俺達はウィッシュテールを抜けた。

化け物―。確かに俺達は人間とは言えないのかもしれない。
だから俺達はどこかに向かうのだと思う。

俺は体を。

セイラは記憶を。

失くしてしまったものを、取り戻すために・・・。

episode 15 追放 (後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2997b/>

MOTHER マザー

2010年12月10日03時43分発行